埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第260集

川越市

南久我原遺跡Ⅱ

主要地方道大宮上福岡所沢線関係埋蔵文化財発掘調査報告

2000

埼　玉　県
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

発刊によせて

21世紀の到来を目前に控え、わが国の社会経済情勢は少子・高齢化、高度情報化、環境問題、財政問題など様々な問題を抱えています。

本県では、こうした問題に的確に対応し、県民一人一人が真の豊かさを実感できる「豊かな彩の国」を実現するために、「環境優先」「生活重視」の基本理念のもと、計画的な県政の推進に努めています。

なかでも道路網につきましては、県民生活や社会活動を支える重要な社会基盤の一つでありますことから、私は知事就任以来、「県内１時間道路網構想」の推進を最重点課題の一つに掲げ、高速道路から生活道路に至るまでの体系的な道路網の整備に取り組んでいます。とりわけ本県は東西を結ぶ道路の整備が課題となっており、鋭意、推進しているところでございます。

県南と県西を結ぶ主要地方道大宮上福岡所沢線につきましては、大宮市内の国道17号バイパスを起点とし、富士見市、川越市、上福岡市、大井町、三芳町を経て所沢市へ至る幹線道路でありますとともに、地元の方々にとりましては、重要な生活道路でもございます。

これらの地域には古（いにしえ）の頃から地域間を結ぶ道があり、それが人々の生活を支え、文化を伝え、徐々に整備されて今日に至っています。この中で人々は多くの文化遺産を地上のみならず、地下にも埋蔵文化財の遺跡として残しています。

こうした先人達の生活を伝える貴重な遺跡は、主要地方道大宮上福岡所沢線整備予定地周辺にも所在し、すでにいくつかの遺跡が発掘調査され、貴重な成果があがっています。

今回報告いたします南久我原遺跡でも、新たな成果を得ることができ、この成果をまとめた報告書が刊行の運びとなりました。県民の教育・文化向上のためにご活用いただければ幸いに存じます。

平成12年７月

埼玉県知事　土屋彰彦

序

埼玉県では「環境優先」「生活重視」「埼玉の新しいくにづくり」を基本理念に、21世紀の豊かな彩の国を目指して、多彩なまちづくりを進めています。

首都圏の「北の玄関」である埼玉県では、道路をはじめとする交通網の整備は最も重要な施策の一つとして、さらなる発展と県民の生活を支える基盤づくりに基づき進められています。

主要地方道大宮上福岡所沢線の整備も、県民の豊かな生活を支え、県内地域間の連携を高めるための施策として計画されたものです。

「小江戸」と称される川越市は、江戸時代に大きく花開きますが、それ以前の縄文時代から室町時代まで数多くの遺跡も知られております。主要地方道大宮上福岡所沢線整備用地内にも埋蔵文化財包蔵地が所在し、平成７年度にも第１次調査が実施されております。

その遺跡の取り扱いについては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置を講じることになりました。当事業団では、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、埼玉県の委託を受け、発掘調査を実施いたしました。

今回の発掘調査では、古墳時代の住居跡や流路跡などが発見され、貴重な遺物も得られました。

本書は、これらの成果をまとめたものです。本書が埋蔵文化財の保護、学術研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及啓発の参考資料として、広く活用していただければ幸いです。

刊行にあたり、発掘調査から報告書刊行に至るまで諸調整にご尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、埼玉県土木部道路整備課、川越土木事務所、川越市教育委員会並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成12年７月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　　中野健一

例 言

1．本書は、埼玉県川越市に所在する、南久我原遺跡（第２次調査）の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番および発掘調査届けに対する指示通知は、以下のとおりである。
南久我原遺跡（第２次調査）（MNMKGHR－II）
川越市大字古市場124-1番地他
平成10年９月１日付　教文第２-98号

3．発掘調査は主要地方道大宮上福岡所沢線の整備建設に伴う事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．本事業は、第Ｉ章の組織により実施した。本事業のうち発掘調査については、昼間孝志、中山浩彦が担当して平成10年８月１日から平成10年９月30日まで実施した。整理・報告書刊行事業については昼間が担当し、平成12年４月10日から平成12年７月31日まで実施した。

5．遺跡の基準点測量は、㈱シン技術コンサルに委託した。

6．発掘調査における写真撮影は、昼間と中山が行い、遺物写真撮影は大屋道則が行った。

7．出土品の整理および図版の作成は、真野目洋子の協力を得て昼間が行った。本書の執筆はＩ－１を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、その他の記述は昼間が行った。

8．本書の編集は調査部資料整理担当の昼間が行った。

9．本書にかかる資料は、平成13年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

10．本書の作成にあたり、下記の方々からご教示、ご協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略）
大野政己、佐々木健策、笹森健一、高木文夫、橋本鶴人、宮崎朝雄、上福岡市教育委員会、川越市教育委員会

凡 例

1．挿図中のX、Yによる座標表示は、国家標準直角座標第Ⅳ系に基づく座標値を示す。また、各挿図における方位表示は、すべて座標北を示す。

2．グリッドは、国家標準直角座標に基づいて設定し、10m×10m方眼である。グリッドの名称は、方眼の北西隅の杭番号である。

3．遺構の表記記号は以下のとおりである。

ＳＪ……住居跡　　ＳＤ……溝跡

ＳＫ……土壙　　ＳＸ……畝状遺構

Ｐ……ピット

4．遺構の名称は原則として、調査時のものを使用した。

5．挿図の縮尺は、遺構１／60、遺物１／４を基本とするが、例外もある。例外については別記した。

6．遺構断面図における水準の数値は、すべて海抜標高である。

7．遺構図中に示した遺物の番号は、遺物の出土位置および接合関係を示し、遺物実測図と一致する。

8．遺構図中のスクリーントーンは竪穴住居跡カマド内の被熱部分を示す。

9．土師器実測図のスクリーントーンは赤彩された範囲を示す。

10．陶磁器実測図のスクリーントーンは釉薬がかかった範囲を示す。

11．遺物観察表は次のとおりである。

・口径、器高、底径は、cmを単位とする。

・（ ）内の数値は推定値である。

・胎土は肉眼で観察できるものを次のように示した。

Ａ－白色粒子　Ｂ－角閃石　Ｃ－石英

Ｄ－雲母　　Ｅ－長石　　Ｆ－赤色粒子

針－白色針状物

・焼成は良好、普通、不良の三段階に分けた。

・残存率は図示した器形に対し、５％単位で示した。

12．地形図の作成にあたっては、以下の地図を使用した。

国土地理院 1/50000地形図「川越」「大宮」

「青梅」「東京西北部」

上福岡市全図 1/2500

目次

発刊によせて
序
例言
凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1．調査に至る経過……1
　2．発掘調査・報告書刊行の経過……2
　3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織……3
Ⅱ　立地と環境……4
　1．歴史的環境……4
　2．古市場河岸と南久我原遺跡について……9
Ⅲ　遺跡の概要……15
Ⅳ　遺構と出土遺物……16
　1．古墳時代の調査……16
　　(1)　住居跡……16
　2．中・近世の調査……20
　　(1)　溝跡……21
　　(2)　土壙……21
　　(3)　ピット……30
　3．その他の遺構と遺物……31
　　(1)　畝状遺構……31
　　(2)　トレンチ及び出土遺物……33
Ⅴ　まとめ……37

挿図目次

第1図　埼玉県の地形……4
第2図　周辺の遺跡……6
第3図　新河岸川の旧河道・河岸場等分布図……8
第4図　福岡河岸と古市場河岸の町並み図……11
第5図　旧橋本家之図……12
第6図　南久我原遺跡調査位置図……13
第7図　南久我原遺跡全体図……14・15
第8図　第1号住居跡……17
第9図　第1号住居跡出土遺物……18
第10図　第2号住居跡……19
第11図　第2号住居跡出土遺物……19
第12図　第1号～第4号溝跡……20
第13図　第1号～第19号土壙……22
第14図　第20号～第35号土壙……23
第15図　土壙出土遺物……25
第16図　第26号土壙出土遺物(1)……26
第17図　第26号土壙出土遺物(2)……27
第18図　第29号土壙出土遺物……28
第19図　ピット・ピット出土遺物……30
第20図　畝状遺構……31
第21図　第1トレンチ出土遺物……32
第22図　第2トレンチ出土遺物……34
第23図　表面採集遺物……35

表目次

第１表　第１号住居跡出土遺物観察表 ……16
第２表　第２号住居跡出土遺物観察表 ……19
第３表　土壙一覧表 ……24
第４表　土壙出土遺物観察表 ……29
第５表　第26号土壙出土遺物観察表 ……29
第６表　第29号土壙出土遺物観察表 ……29
第７表　第７号ピット出土遺物観察表 ……31
第８表　ピット一覧表……31
第９表　第１トレンチ出土遺物観察表 ……32
第10表　第２トレンチ出土遺物観察表 ……33
第11表　表面採集遺物観察表……35
第12表　新旧対照表 ……36

写真図版目次

図版１　遺跡遠景（西から）
　　遺跡近景（東から）
図版２　Ａ区全景（南から）
　　Ｂ区全景（東から）
図版３　第１号住居跡遺物出土状況
　　第１号住居跡遺物出土状況
　　第１号住居跡カマド
図版４　第１号住居跡全景
　　第７号土壙遺物出土状況
　　第９号土壙
図版５　第16号土壙遺物出土状況
　　第26号・第27号土壙
　　第４号溝跡・第34号土壙
図版６　第１号住居跡出土遺物
図版７　第22号土壙出土遺物
　　第26号土壙出土遺物
　　第２トレンチ出土遺物
図版８　第12号土壙出土遺物
　　表面採集遺物
　　第26号土壙出土遺物
図版９　第１トレンチ出土遺物
　　第２トレンチ出土遺物
図版10　第１号住居跡出土遺物
　　第26号土壙出土遺物
　　砥石

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査に至る経過

埼玉県では多様化する県民の生活圏拡大への対応や、高度化する産業活動の円滑化などを図るため、体系的な道路網整備を行っているところである。県道の整備促進については、県内１時間道路網構想を目指した道路網整備を図るとともに、県内地域間の連携を主目的としている。主要地方道大宮上福岡所沢線の整備もその一環で、その中で新河岸川にかかる養老橋の架け替え工事が実施されることになった。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

平成10年１月16日付け道建第383条で、土木部道路整備課長より、建設事業地内における埋蔵文化財の所在及び取り扱いについての照会を受けた。これに対し、文化財保護課では平成10年５月18日に試掘確認調査を実施し、その結果を踏まえて平成10年６月１日付け教文第289号「埋蔵文化財の所在及び取り扱いについて」で、道路整備課長あて回答した。

1　埋蔵文化財の所在

工事予定地には周知の埋蔵文化財が所在します。

名　称	種　別	時　代	所　在　地
南久我原遺跡	集落跡	平　安 中　世 近　世	川越市大字 古市場地内

2　取り扱いについて

現状保存が望ましいが、工事計画上やむを得ず埋蔵文化財包蔵地の現状を変更する場合には、事前に文化財保護法第57条の３の規定による発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施して下さい。なお、発掘調査については当課と協議して下さい。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と道路整備課、文化財保護課の三者により、調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議が行われた。その結果、平成10年８月１日から平成10年９月30日までの期間で、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査に先立って、埼玉県知事から文化財保護法第57条の３の規定に基づく発掘通知が、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から同法第57条第１項の規定に基づく発掘調査届が提出された。

発掘調査に係る通知番号は次のとおりである。

平成10年９月１日付　　教文第２-98号

（文化財保護課）

2．発掘調査・報告書刊行の経過

発掘調査

南久我原遺跡の発掘調査は平成10年８月１日から平成10年９月30日にかけて実施した。調査面積は1,350㎡である。

８月　現地において川越土木事務所と打ち合わせを行い、調査範囲、現場事務所の位置、排土置き場などについて確認した。調査区については県道に通じる市道を残すため、市道の東側をＢ区、西側をＡ区とした。また、排土については、周囲に民家が隣接する状況から土が風で飛ばないようにシートで覆うこととした。

その後、調査区の囲柵工事を行い、調査区内に残存していた廃材等を除去し、表土の掘削にＢ区、Ａ区の順で入った。Ｂ区からＡ区にかけては緩やかに傾斜しており、表土はＢ区は約30cmと浅く、Ａ区は40～60cmと新河岸川に近づくほど深くなっていた。中旬になって表土の掘削が終了したのに伴い、基準点測量を行いながら、併せて補助員を調査区に入れて遺構確認調査を行った。調査区は予想以上に攪乱が入っており、特にＡ区については遺構の大半が攪乱と重複していた。

下旬になって本格的に遺構の調査を行った。調査は表土の掘削と同様、Ｂ区からＡ区の順で進めた。

９月　９月に入る頃より天気が不順になり、曇りや雨の日が多く、遂には台風も襲来した。遺跡内は豪雨のためプール状態となり、水抜きに数日間を要した。その後も遺跡内は水が完全に抜けることはなかったため、やや低い地点に立地するＡ区には排水溝を設け、エンジンポンプによる排水作業を繰り返し行った。上旬～中旬になるとＢ区の調査は終了し、Ａ区も確認された遺構は大半が終了し、埋没谷中の流路跡と考えた部分を中心に調査を進めた。谷部分は台風などの影響もあり予想以上に水位が上がっていたため、重機を使用したトレンチ調査に切り換えを余儀なくされた。その結果、埋没谷部分の中に流路跡を含めた縄文時代から中世にかけての溝跡が数多く構築されていることが判明した。しかし、土壌は水分を多量に含んでいて崩落しやすく、平面図・断面図を作成するまでには至らず、調査を終了した。下旬、図面類等のチェックをした後、調査区の埋め戻し・囲柵の撤去を順次進め、すべての調査を終了した。

整理・報告書刊行

整理・報告書作成事業は平成12年４月10日から平成12年７月31日まで実施した。４月中旬～下旬は遺物の水洗・注記・接合・復元作業、併せて遺構図・写真類の整理、第二次原図の作成を行った。５月上旬～中旬、遺物の実測図の作成・同トレース、遺構図のトレース、拓本、遺物写真撮影等を行った。５月下旬、遺構・遺物等の版組、縮尺図の作成、原稿の執筆を行い、６月初旬に割付を完了した。その後入稿し、７月末日に本書の印刷を終了し、刊行した。

3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査（平成10年度）

理事長	荒井　桂
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	鈴木　進

管理部

専門調査員兼経理課長	関野栄一
主任	江田和美
主任	福田昭美
主任	菊池　久
庶務課長	金子　隆
主査	田中裕二
主任	長滝美智子
主任	腰塚雄二

調査部

調査部長	谷井　彪
調査部副部長	水村孝行
調査第四課長	鈴木秀雄
統括調査員	昼間孝志
調査員	中山浩彦

(2) 整理・報告書刊行（平成12年度）

理事長	中野健一
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	広木　卓

管理部

管理部副部長	関野栄一
主席（庶務担当）	阿部正浩
主席（施設担当）	野中廣幸
主任	菊池　久
主席（経理担当）	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二

調査部

調査部長	高橋一夫
資料副部長	鈴木敏昭
（資料整理担当）	
主席調査員	礒崎　一
統括調査員	昼間孝志

Ⅱ　立地と環境

1．歴史的環境

川越市は埼玉県の南西部に位置し、主に武蔵野台地の北部と荒川西岸に広がる荒川低地から成っている。とりわけ川島町と接する北端部は、越辺川、小畔川、入間川の合流地点になっており、広大な低地を形成している。

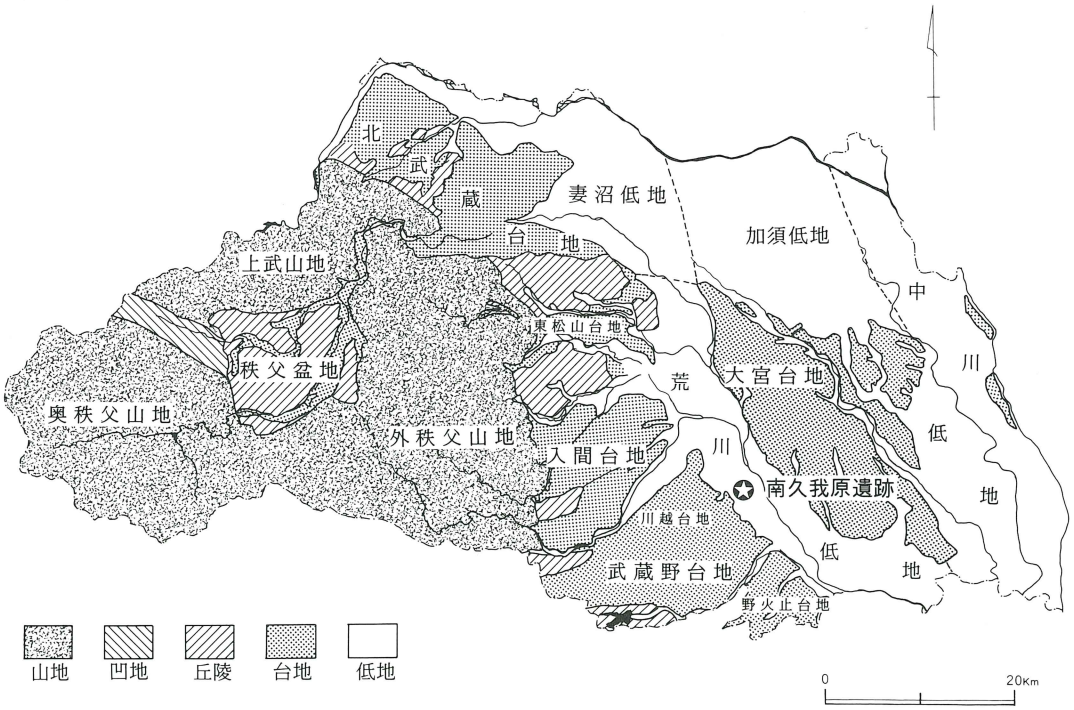
南久我原遺跡は、川越市の中心部から南東へ約2.5km離れた新河岸川左岸の自然堤防上に立地する。遺跡の立地する自然堤防は標高約８ｍで、東西方向に50～200ｍの幅で新河岸川に沿って形成されている。荒川低地の自然堤防は概ね荒川や新河岸川の流れに沿って形成されるが、河川からやや離れた位置に形成される場合は島状になることもある。

新河岸川流域の遺跡は台地上は相当数確認されているが、自然堤防に立地している場合はその存在が不透明であるため、実態を摑みきれていないのが現状である。特に荒川の氾濫源である左岸の調査例は、平成７年の南久我原遺跡第１次調査も含めても僅かに数例である。しかし、現在の地形図にのる住宅区域の広がりは概ね自然堤防上に形成されたものである。今回の南久我原遺跡の成果はこうした自然堤防が早くから形成され、台地上と同じような生活環境が古墳時代には存在したことを示すものとして注目される。以下、南久我原遺跡の立地する川越市南部から上福岡市付近の立地と歴史的な環境について、低地（自然堤防）と台地の遺跡に分けて述べたい。

低地の遺跡では西川原遺跡(中世荘園関連遺跡)、伊佐島遺跡(弥生～中世)、上内手遺跡(弥生～中世)、城山遺跡(中世)、山形遺跡(弥生～古墳)、難波田城跡(中世）などがあり、弥生時代から中世にかけての遺跡が多くみられる。現在のところ縄文時代以前の遺跡は確認されていないが、南久我原遺跡で縄文中期から後期の土器片が確認されたことから、今後の調査次第では自然堤防上でも遺構の検出が期待される。

弥生時代の遺跡は新河岸川に隣接し、複合遺跡となっている場合が多い。今回、南久我原遺跡の第２次調査で初めてこの付近で古墳時代前期・後期の住居跡が

第１図　埼玉県の地形



確認されたように、弥生時代以降安定した自然堤防の地盤が形成され、低地に面しているという地理的条件からある程度継続して集落が営まれていたものと考えられる。また、平安時代の集落については台地上で確認される例が少なく、数軒の住居跡で構成され、点として捉えられることがあったが、最近の調査によって低地にも数多くの集落が形成されていたことが明らかになってきた。

伊佐島遺跡は新河岸川右岸にあり、南久我原遺跡の南約2.6kmに位置している。弥生時代後期の環濠跡、平安時代の集落跡、中世の溝跡などが検出された。新河岸川の対岸には上内手遺跡がある。上内手遺跡からは古墳時代前期、平安時代の集落跡などが検出されている。また、南西約5kmには村山党難波田氏の居城である難波田城跡がある。遺構の残存状態が良く、堀跡や土塁が往時の姿を留めている。北約1kmにある西川原遺跡は自然堤防の先端部に位置し、古尾谷（古谷）荘という河越荘の東方に隣接する荘園跡と考えられている。古尾谷荘は初めは石清水八幡宮領であったが、後に八幡宮による荘園管理が衰退し、在地地頭の支配下に入ったものと考えられている。付近には秩父党古尾谷氏や藤原氏傍流の内藤氏の存在が推定されている。

一方、新河岸川右岸に広がる台地上の遺跡は、標高は10～11mと自然堤防に比べて2m余りの比高差がある。台地上は概ね平坦で、縁辺付近は一部を除いて低地に向かって緩やかな傾斜をし、遺跡の多くは台地縁辺部に見られる。

旧石器時代の遺跡は川越台地を流れる新河岸川支流の福岡江川、川越江川などの小河川の流域に形成されている。川崎遺跡からはナイフ形石器、上福岡貝塚、川崎遺跡、滝遺跡、鷺森遺跡からは尖頭器が出土している。

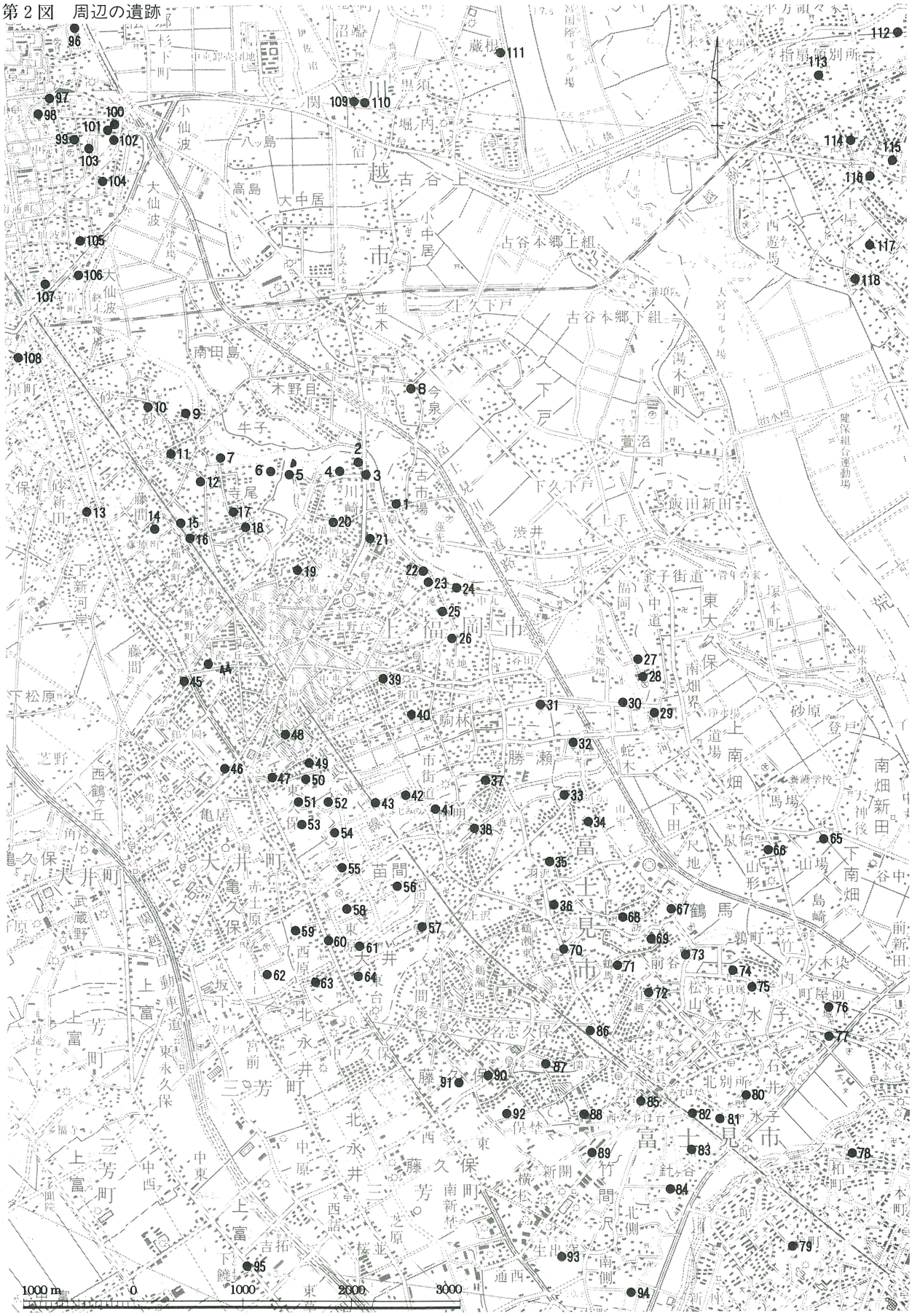
縄文時代の遺跡では、川崎遺跡、上福岡貝塚、寺尾貝塚、宅地添遺跡、ハケ遺跡、鷺森遺跡などがある。台地内部では北野遺跡、西遺跡、鶴ヶ岡遺跡、藤原町遺跡などが知られている。台地内部は中期頃の遺跡の分布が濃く、貝塚を伴う遺跡は台地縁辺部に集中する傾向がある。宅地添遺跡からは付近では最古となる縄文早期の住居跡が検出されている。また、上福岡貝塚や川崎遺跡は前期の集落として知られ、大型の住居跡を含む大規模な集落が形成されている。上福岡市西遺跡、川越市藤間遺跡、大井町鶴ヶ岡遺跡は同一の中期の遺跡で、環状集落を形成している。ハケ遺跡の中期の集落は西遺跡にやや遅れて出現し、住居群に隣接して形成された墓域からは、大人と子供の墓域が異なるなどの特徴がみられる。

縄文後期～弥生時代にかけての遺跡は少なく、僅かに川越市富士見台東遺跡（縄文～中世）、松山遺跡（弥生後期～平安）が知られているにすぎないが、武蔵野台地の低段丘面にあたる富士見市、朝霞市付近では弥生時代の遺跡が数多く分布している。

古墳時代になると、権現山遺跡の前方後方型周溝墓をはじめとする周溝墓群や前期の集落が数多く形成される。権現山遺跡の前方後方型周溝墓は35m級を2号墓を主墓に9基が確認されている。また、川崎遺跡の住居跡からは、畿内で製作された「たたき技法」の甕が出土している。中期以降の遺跡については不透明であるが、後期では丸橋遺跡や滝遺跡で小規模な集落跡が検出されている。

中心的な古墳群には南久我原遺跡の約1.5km北西の川越台地東辺に分布する小仙波古墳群や大塚古墳群がある。小仙波古墳群はこの付近では大規模古墳群の一つで、前方後円墳を含む数十基の円墳群で構成され、多宝塔古墳、慈眼堂古墳、三変稲荷神社古墳などがある。慈眼堂古墳は小仙波古墳群の主墳とみられる前方後円墳で、全長約70mの規模を持つ。前期古墳である三変稲荷神社古墳は、昭和60年に範囲確認調査が行われ、方墳であることが明らかになった。遺物は鼉龍鏡と規格性をもった底部穿孔の単口縁と有段口縁の壺が同比率で出土している。大塚古墳群は小仙波古墳群の南西に位置し、上円下方墳の山王塚古墳や帆立貝式古墳の4号墳を含め、十数基の円墳で構成されている。また、小仙波古墳群の南側一帯には朝霞市の一夜塚古墳・柊塚古墳付近まで古墳の存在は確認されていない

第２図　周辺の遺跡



周辺の遺跡

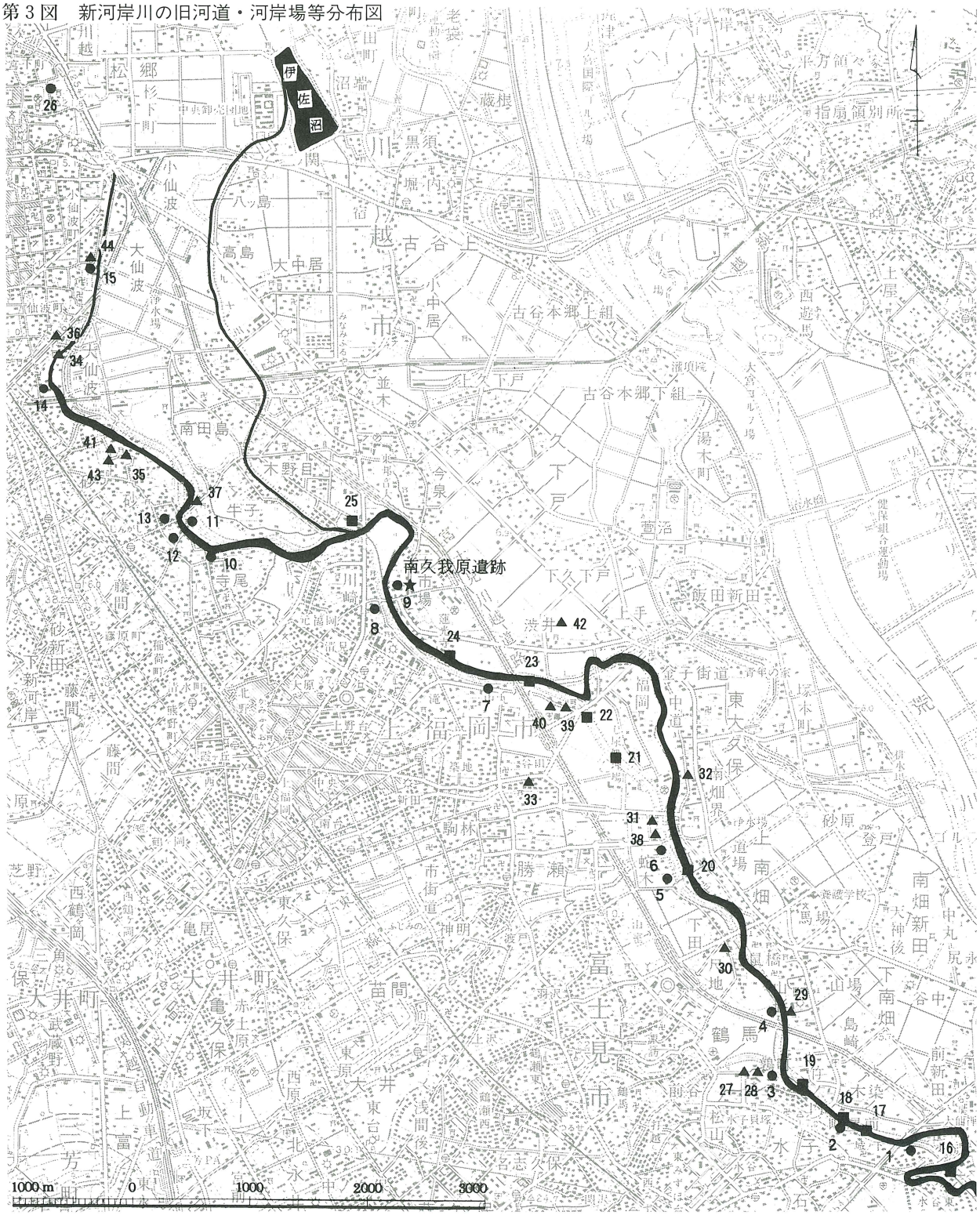
1	**南久我原遺跡**	2	川崎貝塚	3	宅地添遺跡	4	川崎遺跡
5	後原寺側遺跡	6	寺尾貝塚	7	河岸遺跡	8	西河原遺跡
9	寺尾廃寺跡	10	漆谷遺跡	11	河岸原遺跡	12	原遺跡
13	吉田神社古墳	14	藤原町西遺跡	15	藤原町遺跡	16	稲荷町遺跡
17	中原遺跡	18	田成遺跡	19	北野遺跡	20	川崎横穴群
21	ハケ遺跡	22	上福岡貝塚・権現山遺跡	23	滝遺跡	24	丸橋遺跡
25	長宮遺跡	26	松山遺跡	27	城山遺跡	28	上福岡市No.34遺跡
29	上内手遺跡	30	伊佐島遺跡	31	鷺森遺跡	32	宮廻遺跡
33	貝塚山遺跡	34	山室貝塚	35	羽沢遺跡	36	宮脇遺跡
37	苗間東久保遺跡	38	浄禅寺跡遺跡	39	富士見台横穴群	40	駒林中世墳墓
41	神明後遺跡	42	外記塚遺跡	43	中沢遺跡	44	西遺跡
45	鶴ヶ岡遺跡	46	亀居遺跡	47	江川南遺跡	48	鶴ヶ舞遺跡
49	江川東遺跡	50	東久保遺跡	51	東久保西遺跡	52	亀久保堀跡遺跡
53	東中学校西遺跡	54	東久保南遺跡	55	西ノ原遺跡	56	本村遺跡
57	大井東台遺跡	58	東原遺跡	59	五輪山遺跡	60	大井氏館跡遺跡
61	大井戸遺跡	62	小田久保遺跡	63	西台遺跡	64	大井戸上遺跡
65	難波田氏館跡	66	山形遺跡	67	多門氏館跡	68	黒貝戸遺跡
69	殿山遺跡	70	谷津遺跡	71	御庵遺跡	72	打越遺跡
73	山崎遺跡	74	氷川前遺跡	75	水子貝塚	76	観音前遺跡
77	富士見東台遺跡	78	柏之城遺跡	79	西原大塚遺跡	80	正網遺跡
81	別所遺跡	82	栗谷ツ遺跡	83	北通遺跡	84	南通遺跡
85	松ノ木遺跡	86	八ヶ上遺跡	87	本目遺跡	88	三芳唐沢遺跡
89	新開遺跡	90	藤久保東第Ⅲ地点	91	藤久保東遺跡	92	俣埜遺跡
93	生出窪遺跡	94	古井戸山遺跡	95	三富開拓地割遺跡	96	川越城跡
97	多宝塔古墳	98	慈眼堂古墳	99	第一中学校校庭遺跡	100	小仙波貝塚
101	三変稲荷神社古墳	102	小仙波４丁目遺跡	103	弁天西遺跡	104	弁天南遺跡
105	氷川神社古墳	106	愛宕神社古墳	107	浅間神社古墳	108	岸町横穴群
109	古谷神社古墳	110	熊野神社古墳	111	蔵根古墳群	112	西大宮バイパスNo.６遺跡
113	滝沼遺跡	114	大宮市Ｃ-46号遺跡	115	琵琶島貝塚	116	琵琶島遺跡
117	土屋下遺跡	118	大宮市Ｃ-110号遺跡				

空白地帯となっている。南久我原遺跡付近ではむしろ川崎横穴墓群（３基）、岸町横穴墓群（４基）などの古墳時代終末期の横穴墓群が新河岸川支流域に形成されている。

奈良・平安時代になると、熊野神社西遺跡や川崎遺跡など集落が形成される。川崎遺跡では土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦類が出土し、工房跡も検出されている。ハケ遺跡や松山遺跡からは平安時代の集落が検出され、緑釉陶器、火熨子が土師器・須恵器などとともに出土している。また、川崎遺跡やハケ遺跡をのせる台地の北側には新河岸川の支流が入る谷があり、その谷を挟んだ北側の台地上に寺尾廃寺がある。寺尾廃寺は未調査であるため不明な点も多いが、方形基壇の一部が残存し、武蔵国分寺創建期の単弁八葉蓮華紋軒丸瓦なども出土していることから、武蔵国分寺の造営や南比企窯跡群の操業に影響力をもった有力氏族の氏寺である可能性もある。

中世になると、長宮遺跡、川崎遺跡、城山遺跡などの集落や館跡が形成される。遺跡の多くは中世後半に位置付けられるものであり、後北条氏の進出に関連する遺構の可能性も考えられる。長宮遺跡からは溝跡、井戸跡、方形竪穴遺構、墓壙などが検出され、現在の長宮氷川神社を中心とした付近に居館跡が想定されている。川崎遺跡からは溝跡、井戸跡、「炉」をもつ方形竪穴遺構、ピット群などが検出されたが、小規模であることから一般的な集落と考えられている。城山遺跡は『新編武蔵風土記稿』に陣屋跡と紹介され、後北条氏家臣の富永善左衛門の城館と推測されている。城山遺跡からは15世紀を中心とした井戸跡などが検出されている。

第３図　新河岸川の旧河道・河岸場等分布図



1　前河岸	10　寺尾河岸	19　竹の内の渡し	28　水神祠	37　金毘羅大権現祠
2　山下河岸	11　牛子河岸	20　蛇木の渡し	29　水神宮碑	38　大杉大神祠
3　鵜河岸	12　下新河岸	21　湯殿の渡し	30　水神宮碑	39　大杉神社
4　鶴馬本河岸	13　上新河岸	22　下手の渡し	31　水神社碑	40　大杉宮碑
5　蛇木河岸	14　扇河岸	23　花の木の渡し	32　水神祠	41　大杉大神祠
6　伊佐島（勝瀬）河岸	15　仙波河岸	24　滝の渡し	33　水神宮祠	42　辨財天祠
7　百目木河岸	16　乗越の渡し	25　木の目の渡し	34　水神宮祠	43　辨財天社
8　福岡河岸	17　山下の渡し	26　川越城	35　九頭龍大神祠	44　仙波辨財天堂
9　古市場河岸	18　木染の渡し	27　水神祠	36　龍神碑	

2．古市場河岸と南久我原遺跡について

新河岸川は川越市伊佐沼付近に水源を発して川越台地（武蔵野台地）の北東縁を流れ、柳瀬川、黒目川と合流して東京都北区赤羽の岩渕水門で墨田川と合流する小河川である。かつて新河岸川は「九十九曲がり」と称されるほど蛇行していたため、過去に何度となく改修が行われた。昭和初期の改修以前は川越市北東部の伊佐沼（流れ出た水は九十川となって合流）や川越台地縁辺にある湧水を水源とし、和光市新倉付近で荒川と合流していた。また、荒川が外川と呼ばれたのに対し、内川と呼ばれて江戸と川越地域を結ぶ河川の交通路として川越街道とともに重要な役割を果たしてきたが、後に鉄道網の整備されるにともなって衰退した。

新河岸川の名称は「河岸場」、「上新河岸」、「下新河岸」などの呼称や地名に由来すると考えるのが妥当であろうが、由来等が記述された文献は残されていない。文献に最初に登場する「新河岸川」は18世紀中頃以降であり、地元では最近まで「内川」と呼ばれていたことを考慮すると、「新河岸川」と「内川」の名称は併用され、後に「新河岸川」として名をとどめ、一般的には「内川」として語り継がれるようになったものと推察される。

第３図は現在の富士見市から川越市付近における新河岸川の旧河道、河岸場、渡し、水神宮などを示したものである。河岸場の多くは江戸時代に開設されたものであるが、明治時代になって開設されたものもあり、新河岸川流域では30箇所余りを数えるものと推定されている。「渡し」は河岸場付近や河川が蛇行して流れの緩やかな箇所に設けられていることが多い。いつ頃から設けられていたかは明らかではないが、旧河道との位置関係などからも現在の流れに近い状況に改修されてから設けられたものと推察される。「渡し」は伝承によると、主に対岸にある土地で農作業をする際使用されていたとされる。現在でもこの付近では新河岸川を挟んで土地を所有している人が多く見られ、「渡し」の性格を裏付ける傍証といえる。従って河岸場と「渡し」の関連性は薄いものと考えられる。また、新河岸川流域には水神宮や大杉神社などの水難除けや水上の交通安全に関する社が数多くみられる。当時の新河岸川は水量が豊富で、水深や川幅も変化に富んでいたことから、水難事故や洪水などが多く発生していたとみられ、河岸場付近にこれらの神社が建てられたものと考えられる。

新河岸川の河岸場の始まりは、1638（寛永15）年１月16日の大火で焼失した川越仙波東照宮再建の際に江戸から建築資材を運ぶために寺尾村五反田においたのが始まりといわれている（寺尾河岸）。この頃の川越藩主松平信綱は、正保年間頃より新河岸川の整備に着手し、寺尾河岸に続いて新河岸を設けている。その後新河岸は上下に分割され、牛子河岸、扇河岸も加わって元禄の頃には川越五河岸と呼ばれ、城下町川越の外港として重要な役割を担うようになっていった。また、新河岸川の東側を流れる荒川には早くから老袋、平方河岸などの河岸場が開設されて川越藩の物流を担ってきたが、度重なる氾濫や渇水などにより次第に利用されなくなり、より川越城下に近い新河岸川の河岸場が繁栄していったものと推測される。初期の河岸場（川越五河岸）は、いずれも川越城の南約１㎞の近接した地域に開設されているが、寺尾河岸に続く上・下新河岸、牛子河岸、扇河岸はより城下に近い場所を選んで開設されている。

川越五河岸は当初、川越藩関連の年貢米、炭、茶などを江戸へ運ぶことを主目的にし、問屋は御用商人たちの手に委ねられていた。しかし、相次ぐ河岸場の開設により、河岸場間の競争が始まり、廃業を余儀なくされる問屋も出て、寺尾河岸のように次第に衰退する河岸場も現れるようになっていった。その後寺尾河岸は百姓衆や新興の問屋が現れて、御用商人たちの手から新しい担い手へとその性格を変え復興していった。

古市場河岸は川越五河岸で最も南にある寺尾河岸から更に南へ約１㎞の新河岸川左岸に位置している。新河岸川（旧河道）の流れは和光市新倉付近で荒川と合流するまで概ね南東方向の流れを示すが、古市場付近

では大きく北東方向に蛇行し、再度南東方向に向きを変えている。この付近が古市場河岸や福岡河岸が開設された地点である。

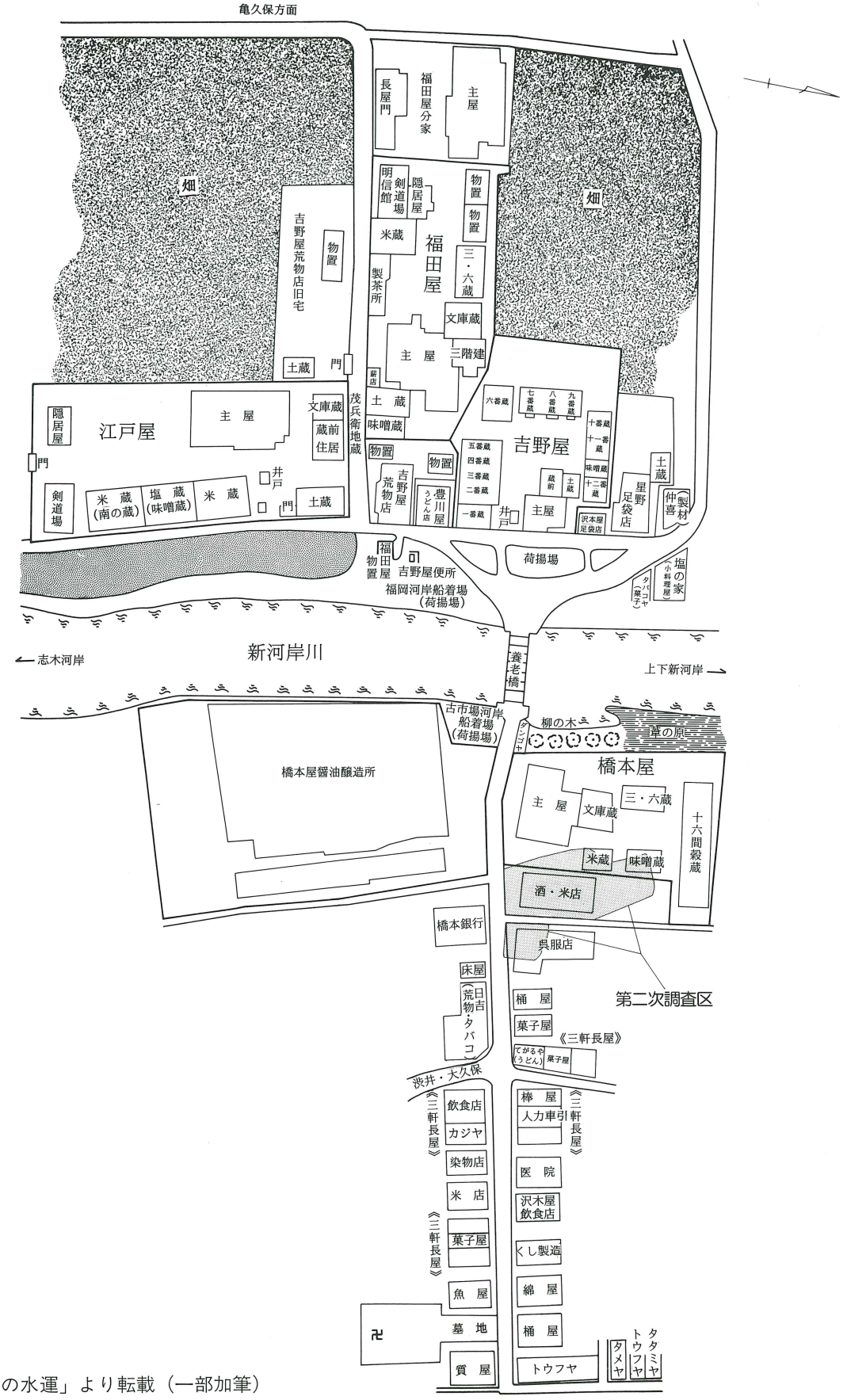
古市場河岸の成立については諸説あるが、有力な資料の一つである「沢田茂一郎家文書」によると、1685(貞享２）年の「炭かよい帳」、「炭送り帳」に古市場河岸の船問屋沢田加兵衛は下名栗村の御運上灰を飯能を経由して扇町谷街道を通り、古市場河岸から江戸へ運んだとの記録が残されている。また、加兵衛はこれより先だって1667（寛文７）年にも川越藩の年貢米を江戸へ回漕したとされているが、確証はなく、現在では貞享年間（1684～88）頃には古市場河岸が成立していたとみるのが有力な説のようである。加兵衛が運搬のために用いた陸上のルートは主に藩が物資の輸送のために使用するものであり、回漕した御運上灰はその名のとおり領主である川越藩や幕府に関連した荷にあたることから、古市場河岸の開設も川越五河岸と同様、川越藩が後ろ盾となっていた可能性が考えられる。また、当時の古市場村は江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』によると戸数60、村の明細帳によると人口349人であったことがわかる。村の規模については中規模で、水田より陸田が多く、干害や水害に弱い地域とされている。沢田加兵衛については沢田家三代目で、当時古市場村の名主でもあったことから、当時の古市場村では最有力者であったものとみられる。船問屋としての加兵衛は御運上灰の他に主に飯能方面からの御運上炭、年貢米、薪なども取り扱い、1695（元禄８）年には江戸に「川越屋加兵衛」を出店させている。

一方、古市場河岸の対岸は福岡河岸で、向かい合うような位置関係で河岸場が置かれ、両岸は古市場板橋（養老橋）によって結ばれていた。古市場板橋は新河岸川左岸の九か村と川越藩を結ぶ要路に架かる橋で、架け替え、修復等に関しては隣接していた古市場村が九ケ村を代表して世話村をしていた。福岡村の福岡河岸には「吉野屋」、「福田屋」、「江戸屋」の三軒の船問屋が開設されている。いずれも開設されるのは享保年間（1716～36）以降であり、古市場河岸より遅れて成立したことが明らかになっている。古市場河岸が川越藩などの御用商人によって始められたのに対して、福岡河岸は農民が農閑期を利用して回漕業を始めたことにその出発点があり、両者には成立過程において大きな相違があった。従って福岡河岸では取り扱う地域や産物が農村を対象としており、主に三富新田付近の地域から野菜や薪を江戸へ送り、江戸からは肥やしや灰などを仕入れていた。

以上のように古市場河岸は福岡河岸に先行して17世紀末頃には成立して、主に川越藩の御用商人である沢田家によって発展していったことがわかるが、実態は不透明な部分も多い。その後、古市場河岸は18世紀末頃には沢田家を含む五軒の公認問屋となり、1830年頃には五軒の問屋は数字上は残るが、事実は一軒が廃業し、一軒が加わっている。その加わった一軒は三次郎（三九郎）といい、幕末まで残った唯一の問屋で、後の「橋本屋」とみられる。三次郎は沢田姓を名乗っており、古市場河岸を始めた沢田加兵衛の直系であるかは明らかではないが、縁者とみられ、屋敷地を新河岸川沿いまで広げるなど、幕末頃には相当な資産家となっていたようである。文献には1869（明治２）年頃に「橋本姓」に改姓したとされているが、それ以前にも1796（寛政８）年の「現金酒之通」に橋本屋三次郎、1834（天保５）年の「酒買請申通手形」に橋本三次郎、1818（文政元）年の「諸職人覚帳」に橋本醤油店、1825（文政８）年の「糖船賃之帳」に橋本屋三次郎の名が見え、改姓以前にも「橋本」の名を使用し、酒販売・醤油の醸造・肥料販売などを手がけていた可能性が高い。また、1862（文久２）年の「土蔵普請入用帳」には橋茂登とあり、問屋が古市場板橋（養老橋）の袂にあったことに由来するような記載が残されている。その後、商家となった三次郎（沢田三九郎）は1866（慶応２）年の武州打ちこわしによって、沢田家（名主・11代加兵衛）らとともに居宅や倉庫などに相当な被害を被っている。

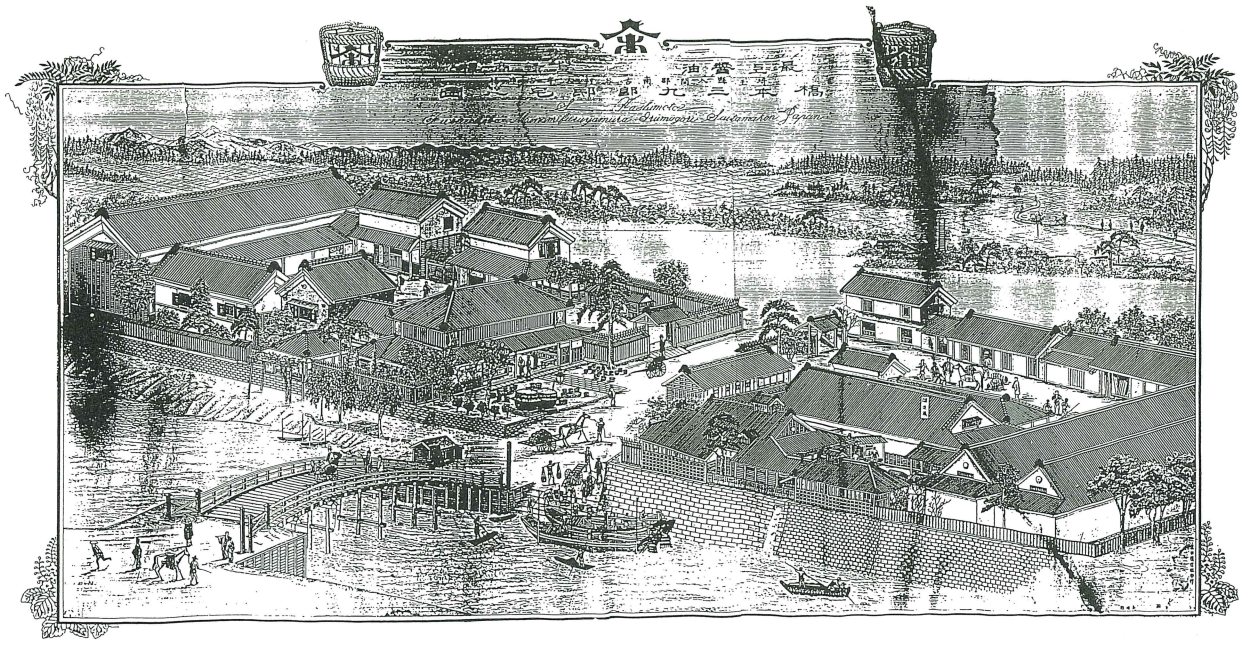
第４図は明治20～40年頃の福岡河岸と古市場河岸付近の町並みを聞き取り調査に基づいて再現した図で

第４図　福岡河岸と古市場河岸の町並み図（明治20年～40年代）



「新河岸川の水運」より転載（一部加筆）

第５図　旧橋本家之図（銅版画・川越市立博物館提供）



ある。この図によると福岡河岸には「吉野屋」、「江戸屋」、「福田屋」の船問屋が、古市場河岸には「橋本屋」という自家製の醤油醸造所をもつ問屋があったことがわかる。古市場河岸周辺の景観は菓子屋、鍛冶屋、桶屋、米屋、医院、質屋などの店舗が要路に沿って立ち並んでおり、当時の古市場村の賑わいがわかる。第４図中にスクリーントーンで示した南久我原遺跡第２次調査区は「橋本屋」の一部、酒・米店、呉服店の跡地に該当するものと考えられ、土壙内から出土した陶磁器類の一部は武州打ちこわし後に廃棄されたものである可能性もある。また、第５図は明治20～40年頃の「橋本屋」の様子を示す銅版画である。養老橋に通じる道路を挟んで南側に醤油醸造所、北側に母屋が配置されている。母屋は主屋と大小複数の蔵から成り、奥には一六間穀蔵と呼ばれる長大な蔵が配されている。船着き場は養老橋の袂、醸造所脇に隣接して設けられている。また、この頃の「橋本屋」は橋本銀行を持つなど最も繁栄する時代を迎えている。慶応２年の打ちこわしから20年余り後の景観であることを考えると、その復旧の早さを窺い知ることができる。

引用・参考文献

今井宏　1992　『伊佐島遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第116集

小野美代子　1998　『南久我原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第201集

上福岡市教育委員会　1996　『沢田茂一郎家文書目録(1)　近世文書編』市史調査報告書　第10集

小暮貞作　1995　「新河岸川福岡河岸の開設」『きんもくせい』市史研究創刊号　上福岡市教育委員会

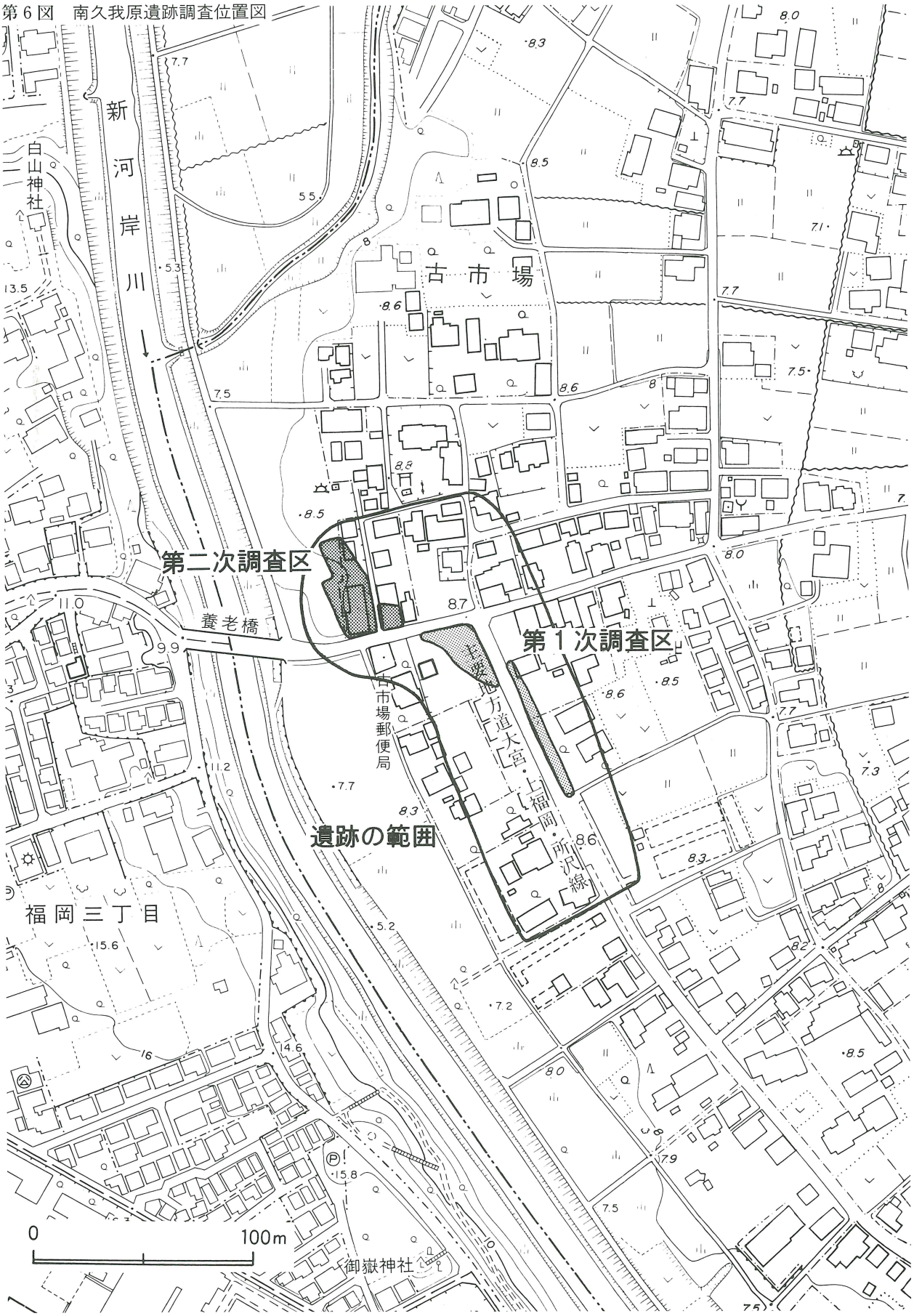
小暮貞作　1996　「新河岸川舟運　早船屋栄次郎父子の事績」『きんもくせい』市史研究第２号　上福岡市教育委員会

小暮貞作　2000　「新河岸川の舟運と河岸場」『上福岡市史』通史編上巻　上福岡市

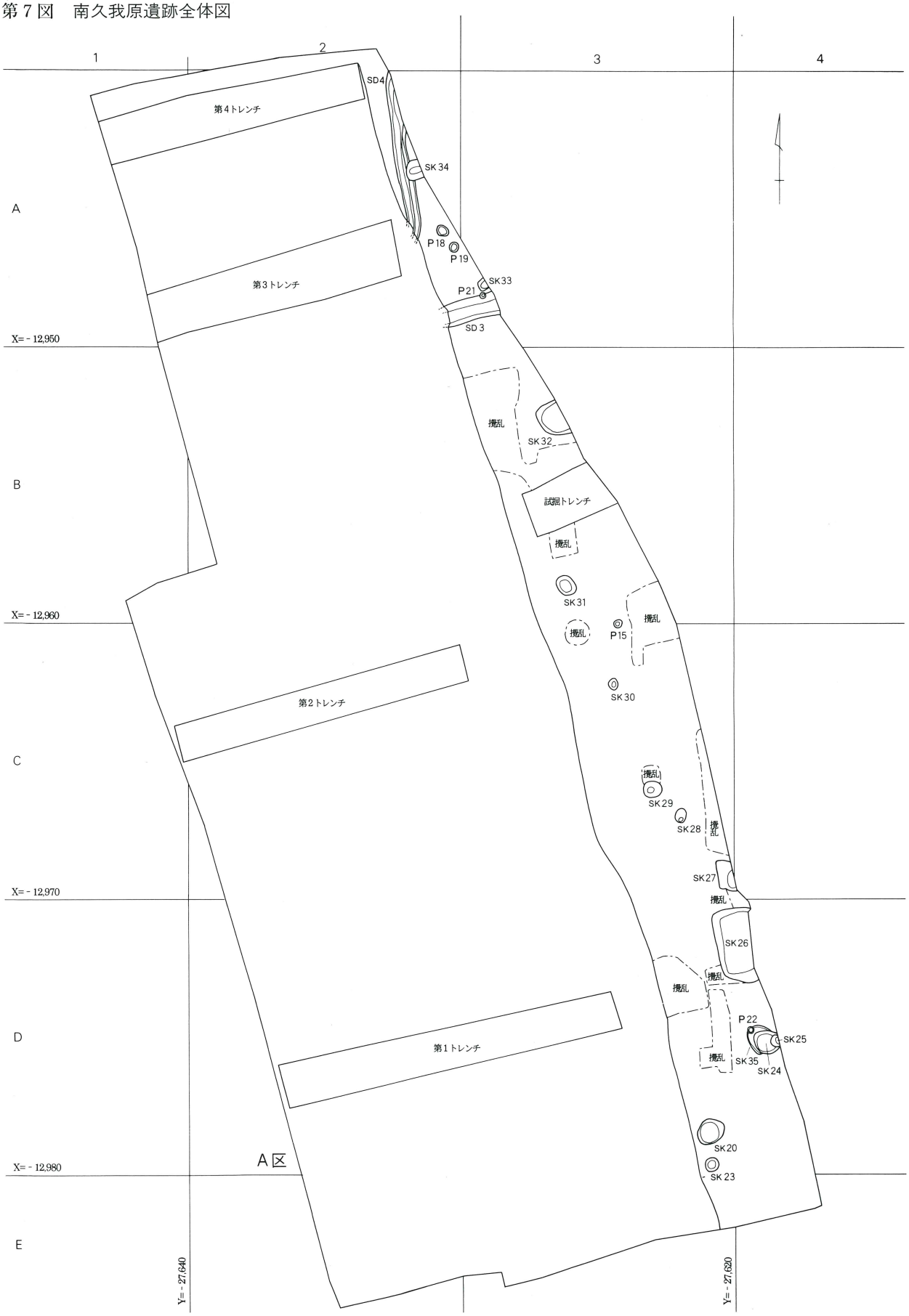
埼玉県教育委員会　1987　「新河岸川の水運」

笹森健一　2000　「武蔵と倭王権」『上福岡市史』通史編上巻　上福岡市

第６図　南久我原遺跡調査位置図



第７図　南久我原遺跡全体図



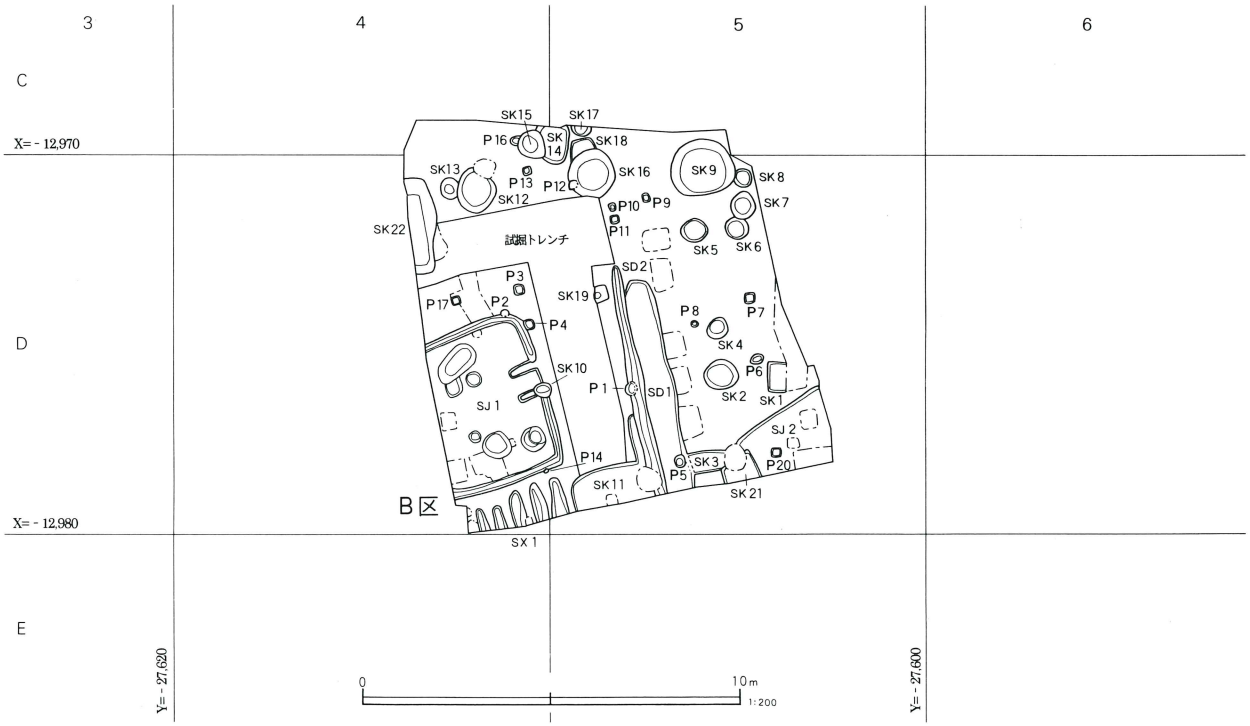
Ⅲ　遺跡の概要

南久我原遺跡は川越市大字古市場124-1番地他に所在する。調査面積は1,350m²である。調査区は新河岸川に隣接した広い部分をA区、市道を挟んで東側の狭い部分をB区とした。調査区付近の標高は約８ｍで、B区付近が自然堤防の最も高い部分であり、新河岸川に近いA区に向かって緩やかに傾斜している。表土の厚さは30～70cmあり、河川に近いほど厚みは増していた。

検出された遺構は住居跡２軒、溝跡４条、土壙35基、ピット22基、畝状遺構１基である。住居跡は古墳時代前期・後期に属し、近世の遺構が密集するために残存状態は良くはなかったが、付近の遺跡では数少ない調査例となった。溝跡はいずれも調査区に僅かにかかっている程度の検出であり、遺物も出土しなかったことから時期や性格などは不明である。土壙は一部古墳時代に属するものが含まれるが、出土遺物から多くは近世と考えられる。近世の土壙は前項で触れたように江戸時代中期以降に繁栄した古市場河岸に関わる屋敷のゴミ捨て穴とみられる。ピットは多数確認されたが、いずれも掘り込みが浅く、配置などからも掘立柱建物跡と認定できなかった。

出土遺物については、縄文土器（中期・後期）、土師器坏、高坏、器台、甕、壷（古墳時代前期・後期）、須恵器坏、甕（平安時代）、大甕（中世）、陶磁器、瓦、焙烙、擂鉢、植木鉢、片口鉢、古銭、砥石、人形、煙管（近世）である。このうち縄文時代、古墳時代前期、平安時代の土器群については大部分が流路跡から出土したもので、流れ込んだものと理解した。

周辺では平成７年度に第２次調査区の南側で第１次調査が行われている。調査対象面積は約500m²で、古墳跡１基、平安時代の掘立柱建物跡１棟、近世の竪穴状遺構１基、溝跡３条、土壙２基が検出された。出土遺物は縄文土器（後期）、土師器高坏、甕、小型壷、台付甕、須恵器甕、横瓶（古墳時代前期・後期）、須恵器坏（平安時代）、大甕（中世）、陶磁器、砥石（近世）である。遺構の構成についてはやや異なるが、出土遺物については第２次調査と同様な傾向が窺われる。古墳時代前期の遺構は検出できなかったが、遺物の占める比率は以外に高く、付近に該期の遺構が存在するものと考えられる。



Ⅳ　遺構と出土遺物

１．古墳時代の調査

概要

検出された古墳時代の遺構は、前期、後期の住居跡が各１軒である。２軒の住居跡はいずれもＢ区で検出されたが、遺跡の中では比較的標高の高い地点に構築されていた。住居跡が検出された地点は攪乱が多く入っており、住居跡も含めて残存状態は不良であった。また、土壙の中には古墳時代に該当するものも一部考えられたが、攪乱と重複している場合もあり、他項で記述した。

(1)　住居跡

第１号住居跡（第８図）

Ｂ区の西側、Ｄ－４グリッドにおいて全体の約３分の２が検出された。既に住居の壁面は大半が失われており、殆ど床面に近い状態であった。平面形態は正方形に近い長方形とみられる。南北は3.2m、東西は西側部分が市道下にあるが、３ｍ前後と推定される。主軸方向はＮ－70°－Ｅである。

住居跡の覆土はシルト質の暗褐色土で、ローム質のブロックや焼土粒子が混入する。床面は平坦であるが、やや南側に傾斜している。ピットは土壙状のものも含めて６基検出された。Ｐ３は攪乱の影響を受け土壙状となっているが、位置的にも柱穴に該当するものであろう。Ｐ４とＰ５は重複し、付近から集中して土器が出土した。Ｐ２には古い様相をもつ土器もみられることから、この住居跡に伴わない可能性も考えられる。Ｐ１は南東隅に位置し、形状などからも貯蔵穴とみられるが、下層に重複するピットの痕跡が認められた。

カマドは東壁中央に設けられている。袖は両袖とも残っていたが、南側の袖は一部をＳＫ10との重複によって壊されていた。煙道の掘り込みは東壁付近で止まる古い時期にみられるタイプである。燃焼部は殆ど掘り込まれたような痕跡や焼土はなく、スクリーントーンで示したように僅かに被熱部分が確認できただけであった。

壁溝はカマド部分を除いて全周するものとみられる。幅は約12cm、深さは約10cmで、南側に向かって傾斜している。壁溝内からは土器の細片や炭化物も少量出土している。

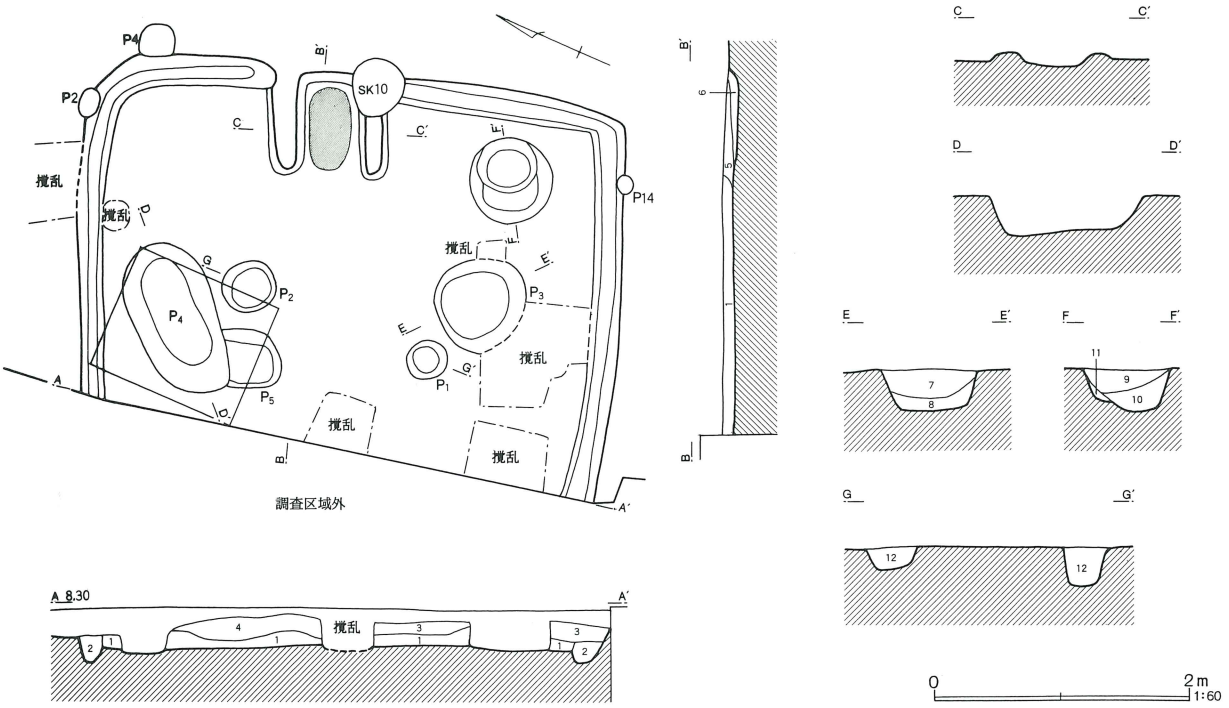
出土遺物（第９図）

出土遺物は土師器坏、小形甕、甑である。遺物はＰ２・４・５付近の床面から集中して出土した。１は比企型坏の小破片である。内面から口縁部外面にかけて赤彩される。２は小形の甕で、全体に僅かな歪みがみられる。ヘラケズリなどの調整痕は風化のために確認できない。３～５は甕形土器で、３は口縁部が直線気味に立ち、横ヘラケズリされる胴部上半が張るタイプである。口縁部から胴部上半にかけては赤彩される。５は口縁部が大きく外反し、胴部中央が張るタイプである。２と同様器面の風化が進んでいる。６～７は甕で、８は底部に木葉痕が残る。９は甑である。器面は風化が進み、調整痕は確認できない。

第１表　第１号住居跡出土遺物観察表（第９図）

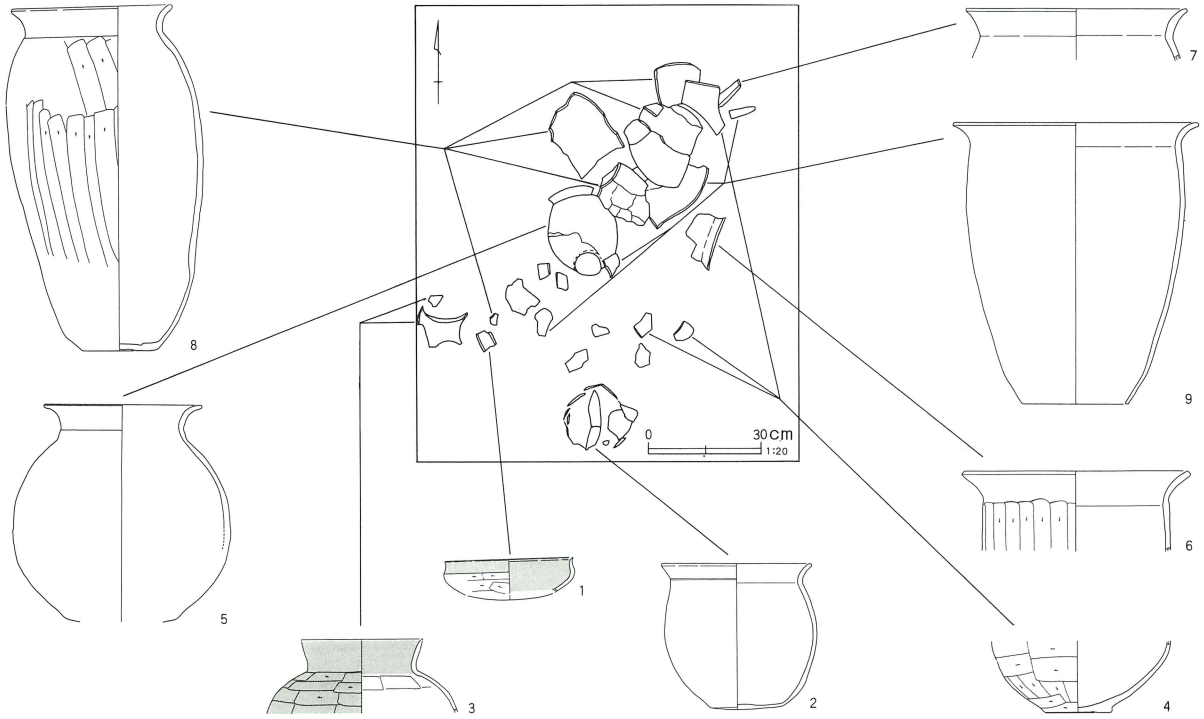
番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	出土位置	備　考
1	土師器坏	(13.4)	(3.6)		ＡＦ	普通	赤褐色	10	No.18	赤彩
2	土師器甕	(15.6)	15.2	7.8	ＡＢＣＦ	普通	淡褐色	50	No.29	器面風化著しい
3	土師器甕		(7.7)		ＡＥＦ	普通	赤褐色	30	No.20・21・22	赤彩
4	土師器甕		(7.5)	6.8	Ｆ	普通	褐色	60	No.2・14・17・25・26・27	
5	土師器甕	(16.3)	22.8	(11.4)	ＡＢＣＦ	普通	褐色	30	No.29・30	器面風化著しい
6	土師器甕	(23.6)	(8.4)		ＡＢＣＦ	普通	褐色	10	No.12	
7	土師器甕	(23.1)	(5.4)		ＡＢＣＦ	普通	明褐色	10	No.4	器面風化著しい
8	土師器甕	(16.5)	36.3	8.0	ＡＢＣＦ	普通	褐色	40	No.1・3・7・9・10・19・46	底部木葉痕
9	土師器甑	(25.5)	29.5	(11.1)	ＡＢＣＦ	普通	明褐色	20	No.3・5・11・13・16	器面風化著しい

第８図　第１号住居跡

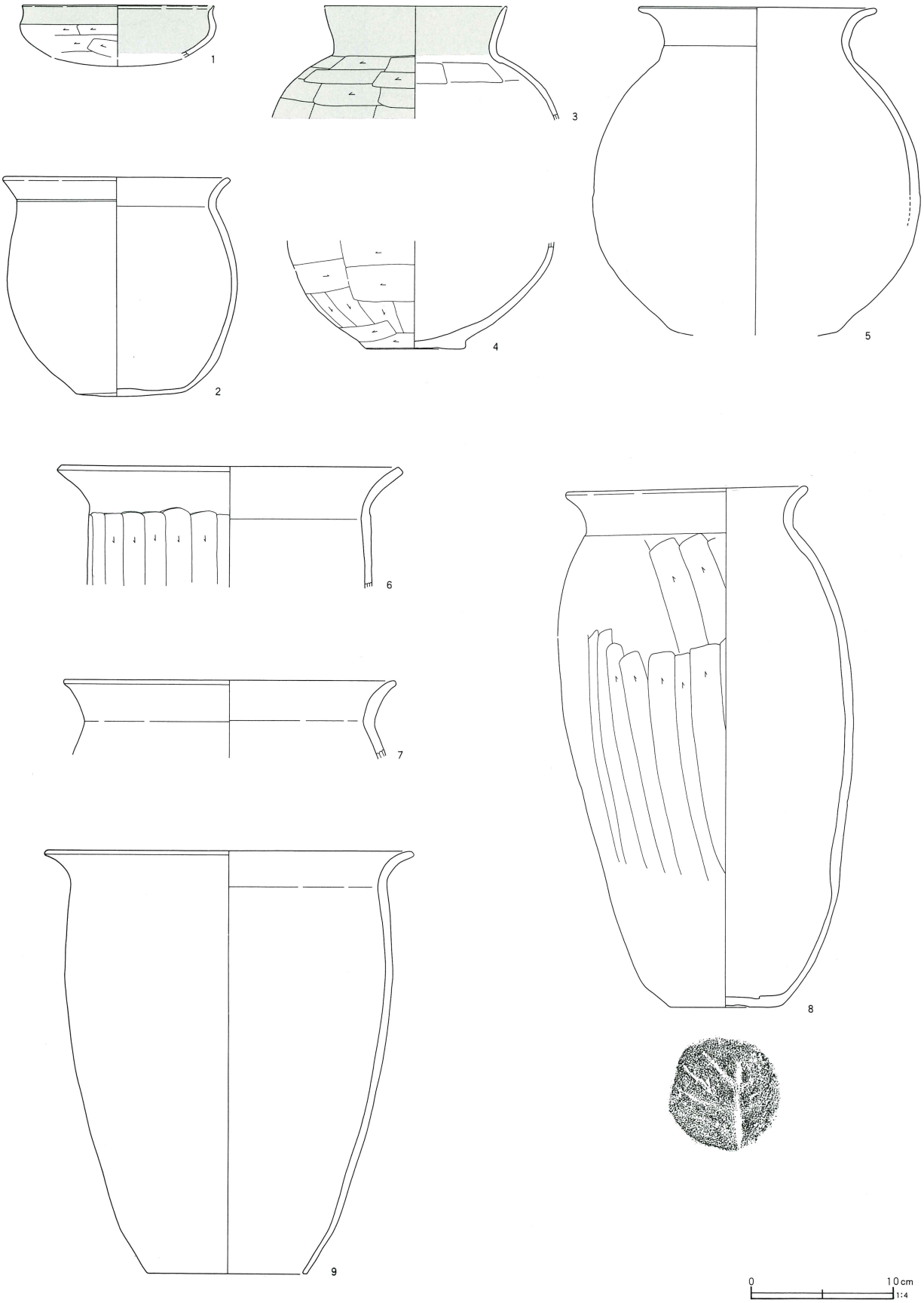


ＳＪ１

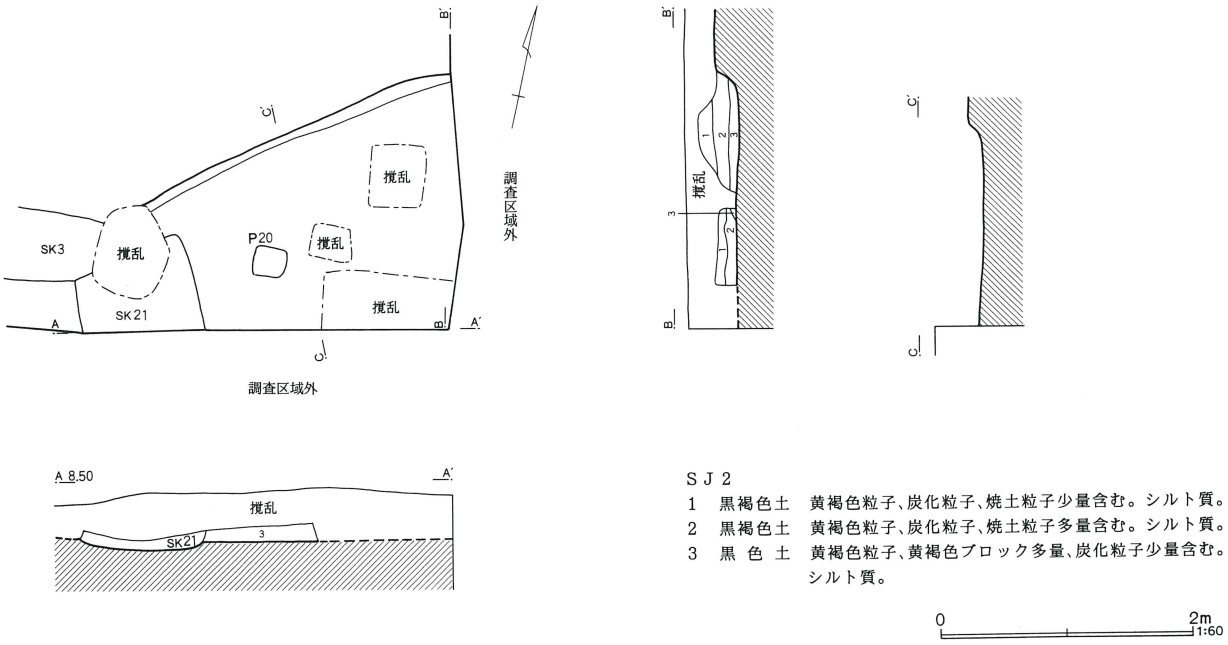
1　黒 褐 色 土　ローム粒子、焼土粒子、ロームブロック少量含む。
2　黒 褐 色 土　ロームブロック多量含む。
3　暗 褐 色 土　ロームブロック少量含む。
4　暗 褐 色 土　ロームブロック多量、砂粒子少量含む。
5　黄 褐 色 土　焼土ブロック多量、炭化粒子、焼土粒子、ローム粒子少量含む。
6　暗 褐 色 土　焼土ブロック、ローム粒子、焼土粒子、炭化粒子少量含む。
7　黒　色　土　黄褐色ブロック多量、炭化粒子少量含む。シルト質。
8　明黄褐色土　黄褐色ブロック多量含む。シルト質。
9　黒 褐 色 土　黄褐色粒子、炭化粒子、焼土粒子少量含む。シルト質。
10　黒 褐 色 土　黄褐色ブロック多量含む。シルト質。
11　明黄褐色土　黄褐色シルト質土主体。（地山崩落土）
12　黒 褐 色 土　黄褐色ブロック、炭化粒子、焼土粒子少量含む。



第９図　第１号住居跡出土遺物



第10図　第２号住居跡



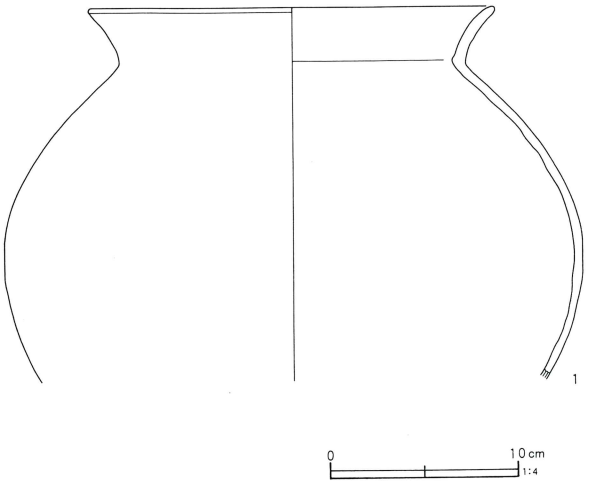
第２号住居跡（第10図）

Ｂ区の南東隅、Ｄ－５グリッドに位置する。住居跡全体の約1/4が検出されたが、ＳＫ３、21などの土壙や撹乱がいたるところにあり、北辺の一部が検出されただけにとどまった。炉跡は検出されなかった。遺構確認面からの深さは10cm前後である。覆土はシルト質の黒褐色土で、黄褐色粒子・炭化粒子・焼土粒子が混入するが、覆土中にも撹乱に含まれる灰褐色ブロックが混入していた。床面は概ね平坦であるが、東寄りは僅かに盛り上がる箇所があるなど部分的に起伏もみられた。また、壁溝、貯蔵穴、柱穴などは検出されなかった。

出土遺物（第11図）

遺物は住居跡の残存状態が悪く、北辺の壁際より土師器壷の破片が潰れた状態で出土した。１の甕形土器はやや大振りで、口縁部は「くの字」にひらき、胴部中央が張るタイプである。本来は口縁部及び胴部は刷毛目が及んでいるものと考えられるが、全体に器面の風化が著しく、調整の痕跡は認められなかった。

第11図　第２号住居跡出土遺物



第２表　第２号住居跡出土遺物観察表（第11図）

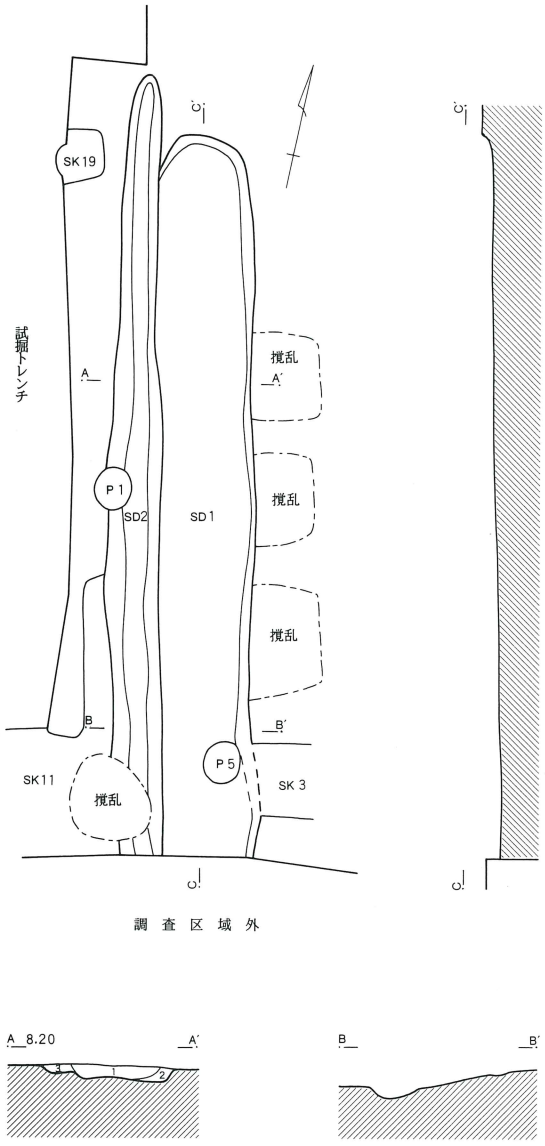
番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	出土位置	備　考
1	土師器甕	(21.4)	(19.6)		F	普通	褐色	10	No.1・2	器面風化著しい

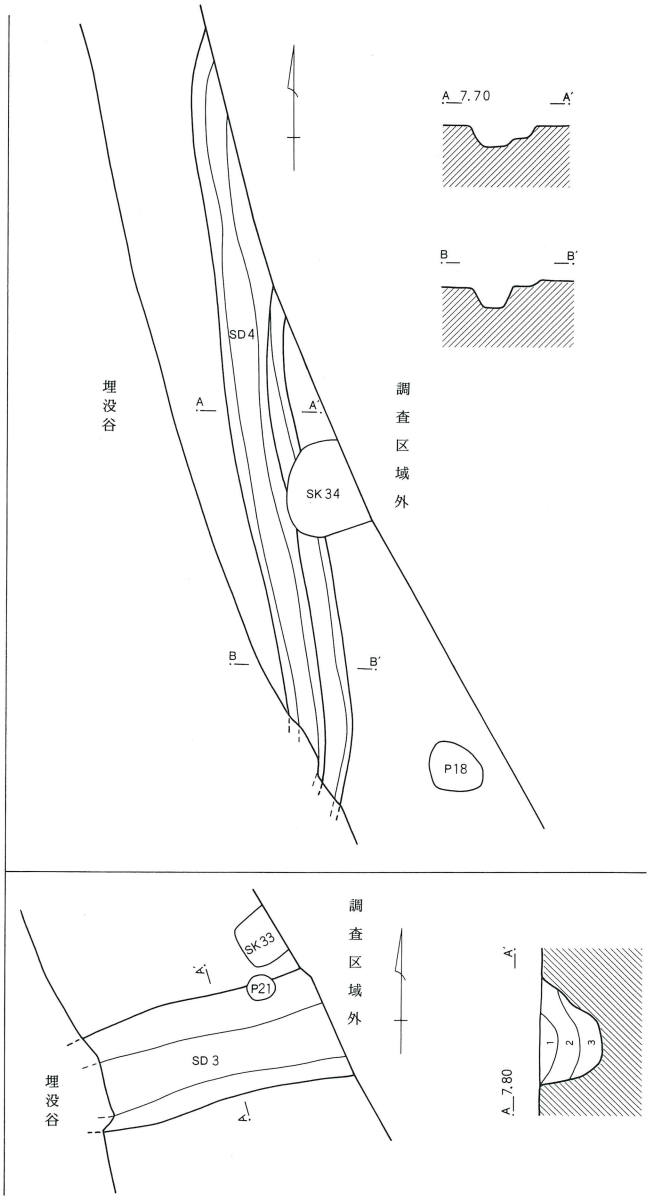
2．中・近世の調査

概要

検出された中・近世の遺構は溝跡４条、土壙35基、ピット22基、畝状遺構１基である。遺構の中心は近世で、遺物は主に近世後期の陶磁器類が出土した。中世の遺構については明瞭なものがなく、遺物も近世の土壙に混入している場合が多かった。また、A区の西側には中・近世以前の流路跡とみられる遺構を埋没谷中から確認できたが、水位が高い為、トレンチ調査に切り換えた。なお、トレンチから出土した遺物についてはその他の遺物の項目中で取り扱った。

第12図　第１号～第４号溝跡





ＳＤ１・２

1　黒褐色土　黄褐色粒子、黄褐色ブロック多量、炭化粒子少量含む。シルト質。
2　褐 色 土　黄褐色粒子少量含む。シルト質。
3　暗褐色土　黄褐色粒子少量含む。シルト質。

ＳＤ３

1　黒褐色土　黄褐色粒子、焼土粒子、炭化粒子少量含む。シルト質。
2　黒褐色土　黄褐色ブロック多量、焼土粒子、炭化粒子少量含む。シルト質。
3　黄灰色土　黄褐色ブロック、炭化粒子少量含む。シルト質。

0　2m　1:60

(1)　溝跡（第12図）

溝跡はA区から２条、B区から２条検出された。

第１号溝跡（ＳＤ１）

B区D－５グリッドに位置し、西辺がＳＤ２と重複する。南北方向の溝で、検出された長さは5.7m、幅80cm、深さ10cmである。覆土は黒褐色土で、疑似ローム風のブロックが主体である。遺物は出土していないが、付近の江戸時代の土壙と覆土が似ており、同時期のものと考えられる。

第２号溝跡（ＳＤ２）

B区D－５グリッドに位置する南北溝で、東辺が平行するＳＤ１と重複する。検出された長さは6.1m、幅30cm、深さ５cmである。覆土は暗褐色土で、疑似ローム粒子が混入する。遺物は出土しなかったが、ＳＤ１とほぼ同時期と考えられる。

第３号溝跡（ＳＤ３）

A区A－２・３グリッドに位置する東西溝である。東側は調査区外、西側は埋没谷中に入るため、大半は確認できなかった。検出された長さは2.1m、幅90cm、深さ50cmである。覆土は黒褐色土で、ＳＤ１に類似する。遺物は出土していない。

第４号溝跡（ＳＤ４）

A区A－２グリッドに位置する南北溝で、北側は調査区外、南側は埋没谷中に入るため、確認できていない部分が多い。溝跡は西側が深く、東側が浅いことから２条の可能性も考えられる。検出された長さは6.2m、幅50cm、深さ20cmである。遺物は出土していない。

(2)　土壙（第13・14図）

土壙はA区から14基、B区から21基検出された。調査区には攪乱が多く入っており、不確定な要素もあるが、立地上高台に位置するB区に集中する傾向がある。覆土は暗褐色土または黒褐色土のものが多く、埋没過程には一括投棄される場合と流れ込まれた場合がみられた。形態は円形、楕円形、方形、長方形などと規模とともに多種多様である。出土遺物には肥前産染付碗、同皿、同筒形碗、瀬戸産染付碗、灰釉灯明皿、片口鉢、擂鉢、焙烙、大甕、石臼、煙管、土人形、砥石、古銭などである。遺物は殆どの土壙から少なからず小破片を伴っていたが、本稿では実測可能な遺物を伴う土壙に限定して記載した。なお、調査時において井戸跡が２基検出されたが、再度検討を行った結果、井戸としては不十分であることから土壙として取り扱うこととなった。

第７号土壙（ＳＫ７　第13・15図）

B区D－５グリッドに位置し、同規模のＳＫ６と重複する。平面形態は楕円形である。覆土はシルト質の黒褐色土で、焼土粒子や炭化粒子が混入する。遺物はすべて覆土中より出土した。１は瀬戸美濃産の染付端反碗。２は産地不明染付筒型碗で、腰の部分に厚味がある。３は瀬戸美濃産染付端反碗で、外面は放射状文、茶溜まりの記号は判読不明である。４は肥前産染付広東碗で、外面は剣先文が濃淡で交互に描かれている。５は平瓦または軒桟瓦を転用した砥石で、全面に使用痕がみられる。19世紀前半。

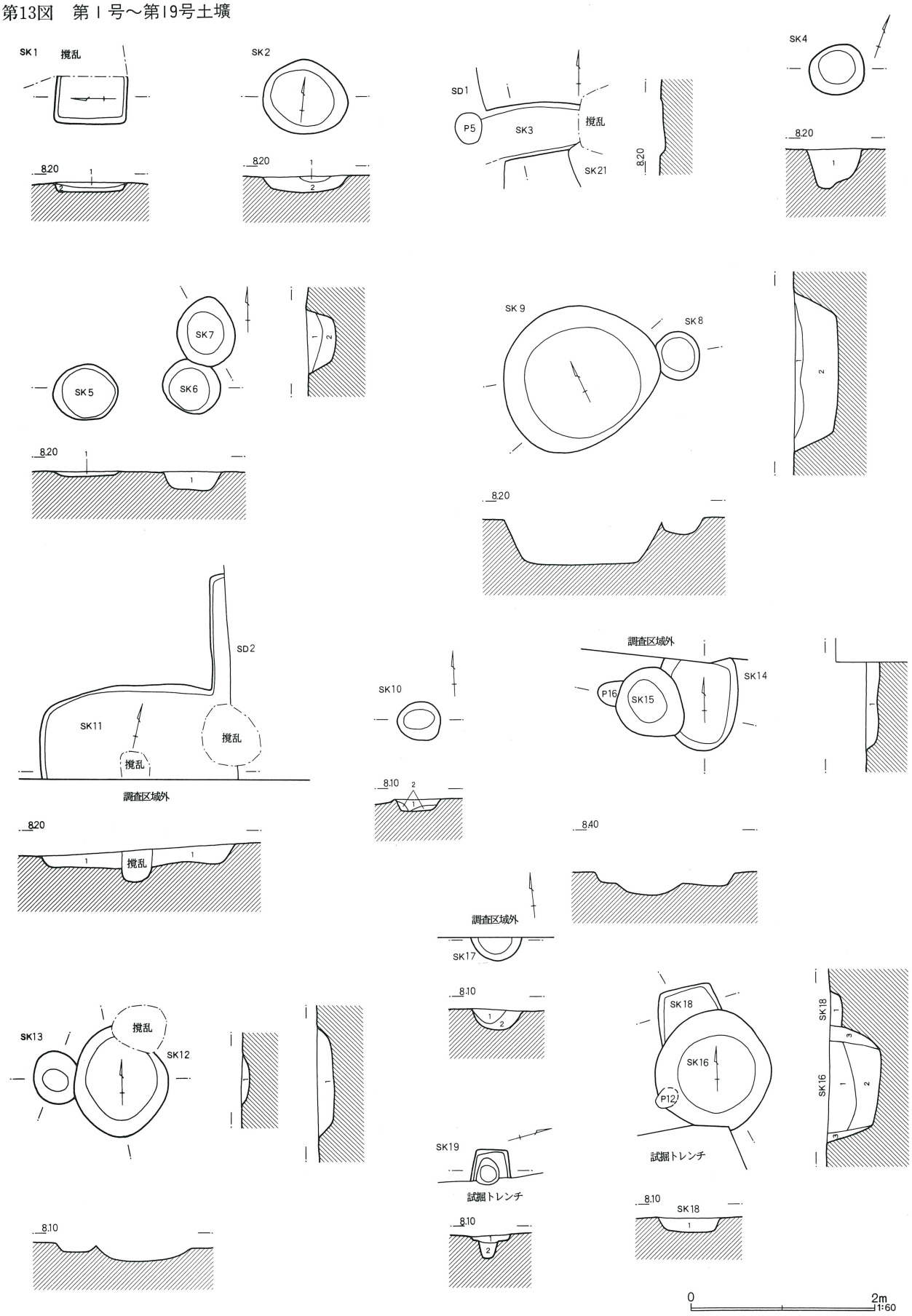
第９号土壙（ＳＫ９　第13・15図）

B区D－５グリッドに位置し、ＳＫ８と重複する。平面形態は楕円形である。覆土はシルト質の黒色土で、疑似ロームブロックが混入する。６は擂鉢の口縁部破片で、信楽産とみられる。７は５と同じく平瓦を転用した砥石である。８は石臼の破片で、外側の摩滅が著しく、何らかに再利用された可能性もある。18世紀末頃から19世紀前半。

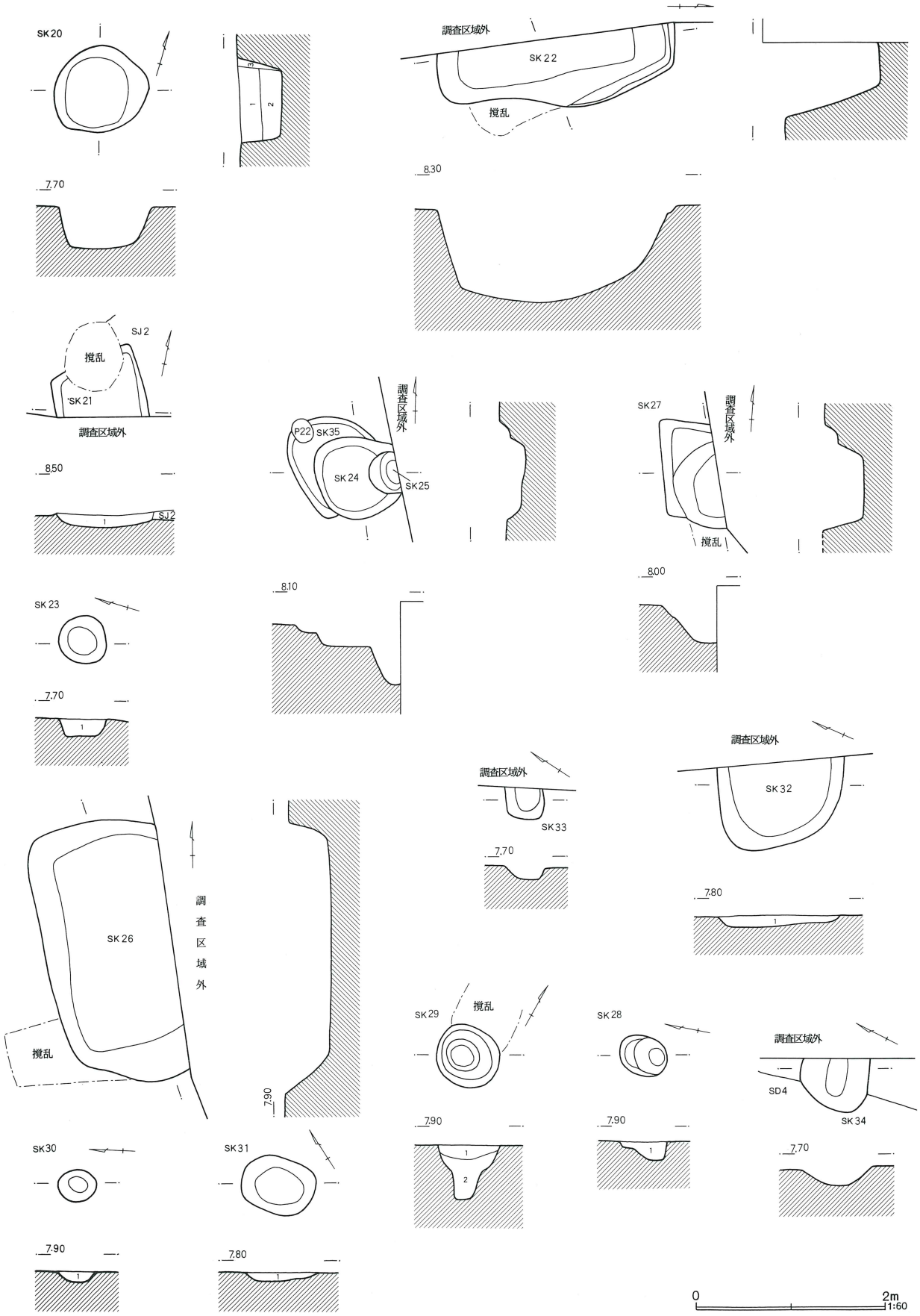
第12号土壙（ＳＫ12　第13・15図）

B区D－４グリッドに位置し、ＳＫ13と重複する。

第13図　第１号～第19号土壙



第14図　第20号～第35号土壙



ＳＫ１
1　黒　色　土　黄褐色粒子多量、炭化粒子、焼土粒子少量含む。シルト質。
2　明黄褐色土　黄褐色土多量含む。シルト質。
ＳＫ２
1　黒　色　土　黄褐色粒子多量、炭化粒子、焼土粒子少量含む。シルト質。
2　明黄褐色土　黄褐色土多量含む。シルト質。
ＳＫ４
1　黒 褐 色 土　黄褐色ブロック多量、炭化粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ５
1　黒 褐 色 土　黄褐色ブロック多量、炭化粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ６
1　黒 褐 色 土　黄褐色ブロック多量、炭化粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ７
1　黒 褐 色 土　炭化粒子、焼土粒子、焼土ブロック多量含む。シルト質。
2　黒　色　土　炭化粒子多量含む。シルト質。
ＳＫ９
1　黒　色　土　黄褐色ブロック、炭化粒子少量含む。シルト質。
2　黄 灰 色 土　黄灰色ブロック多量含む。シルト質。
ＳＫ10
1　黒 褐 色 土　黄褐色ブロック少量含む。シルト質。
2　明黄褐色土　黄褐色土多量含む。シルト質。（地山崩落土）
ＳＫ11
1　黒 褐 色 土　黄褐色ブロック、炭化粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ12
1　黒　色　土　炭化粒子、焼土粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ13
1　黒 褐 色 土　黄褐色粒子、炭化粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ14
1　黒 褐 色 土　黄褐色ブロック多量、炭化粒子、焼土粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ16
1　黒 褐 色 土　黄褐色ブロック多量、炭化粒子少量含む。シルト質。
2　黒　色　土　炭化粒子多量含む。シルト質。
3　黄 褐 色 土　掘形。
ＳＫ17
1　黒　色　土　炭化粒子、焼土粒子多量含む。シルト質。
2　褐 灰 色 土　炭化粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ18
1　黒　色　土　炭化粒子多量、焼土粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ19
1　黒 褐 色 土　黄褐色ブロック多量、炭化粒子少量含む。シルト質。
2　黒　色　土　黄褐色ブロック多量含む。シルト質。
ＳＫ20
1　灰　色　土　黄褐色ブロック、焼土粒子多量、炭化粒子少量含む。シルト質。
2　灰　色　土　炭化粒子少量含む。砂質。
3　黄 褐 色 土　掘形。
ＳＫ21
1　黒　色　土　黄褐色ブロック多量、炭化粒子、焼土粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ23
1　暗 褐 色 土　焼土粒子、炭化粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ28
1　黒　色　土　黄褐色ブロック、炭化粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ29
1　黒 褐 色 土　炭化粒子少量含む。シルト質。
2　灰　色　土　炭化粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ30
1　黒　色　土　黄褐色ブロック、炭化粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ31
1　暗 褐 色 土　焼土粒子、炭化粒子少量含む。シルト質。
ＳＫ32
1　黒 褐 色 土　炭化粒子多量、焼土粒子少量含む。シルト質。

第３表　土壙一覧表

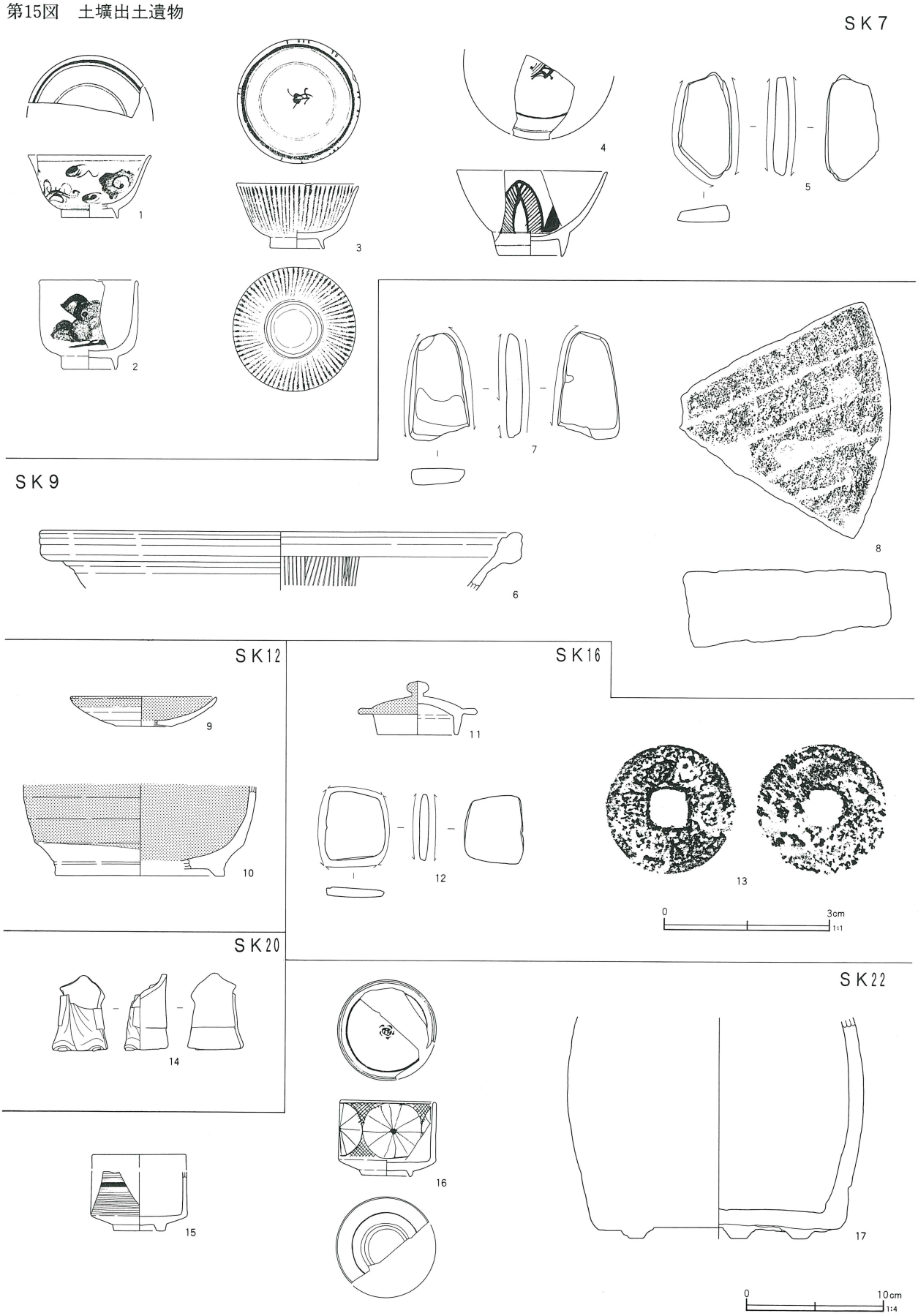
番号	位　置	主軸方向	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	D－5	N-89°-W	0.80	(0.51)	0.11
2	D－5	N-83°-E	0.92	0.81	0.18
3	D－5	N-84°-E	(0.98)	0.58	0.08
4	D－5	N-72°-E	0.61	0.55	0.44
5	D－5	N-82°-E	0.72	0.59	0.06
6	D－5	N-62°-W	0.62	(0.54)	0.20
7	D－5	N-9°-E	0.75	0.63	0.32
8	D－5	N-4°-E	0.53	(0.45)	0.19
9	D－5	N-75°-E	1.72	1.49	0.51
10	D－4・5	N-85°-W	0.49	0.40	0.12
11	D－5	N-13°-W	2.16	(1.02)	0.21
12	D－4	N-9°-W	1.20	1.03	0.19
13	D－4	N-23°-E	0.55	(0.45)	0.09
14	D－4・5	N-1°-E	(0.96)	0.85	0.15
15	D－4	N-38°-W	0.82	0.71	0.26
16	D－5	N-27°-W	1.29	1.25	0.57
17	D－5	N-5°-E	0.65	(0.26)	0.21
18	D－5	N-27°-W	0.71	(0.38)	0.15
19	D－5	N-72°-E	0.41	(0.38)	0.25
20	D－3	N-73°-E	1.03	0.88	0.47
21	D－5	N-20°-W	1.01	(0.77)	0.13
22	D－4	N-83°-E	2.56	(0.75)	1.04
23	D－3	N-17°-W	0.53	0.51	0.18
24	D－4	N-74°-E	(0.93)	0.86	0.23
25	D－4	N-90°-E	0.44	(0.31)	0.63
26	D－3・4	N-72°-E	2.84	(1.37)	0.48
27	C－3・4	N-76°-E	1.12	(0.58)	0.43
28	C－3	N-12°-W	0.51	0.41	0.19
29	C－3	N-61°-E	0.68	0.61	0.58
30	C－3	N-3°-W	0.41	0.34	0.11
31	B－3	N-56°-W	0.80	0.59	0.09
32	B－3	N-62°-E	1.36	(0.89)	0.12
33	A－3	N-55°-E	0.41	(0.33)	0.14
34	A－2	N-72°-E	0.74	(0.54)	0.18
35	D－4	N-41°-W	(0.89)	(0.81)	0.09

平面形態は楕円形である。覆土はＳＫ７に類似した黒褐色土で、疑似ローム粒子が混入する。９は灰釉皿で、口縁部に煤がかかることから、灯明皿として使用されたものと見られる。10は瀬戸美濃産鉢又は半胴甕の破片である。釉薬は浸けかけで、内面から体部外面にかけてかかる。18世紀末頃から19世紀前半。

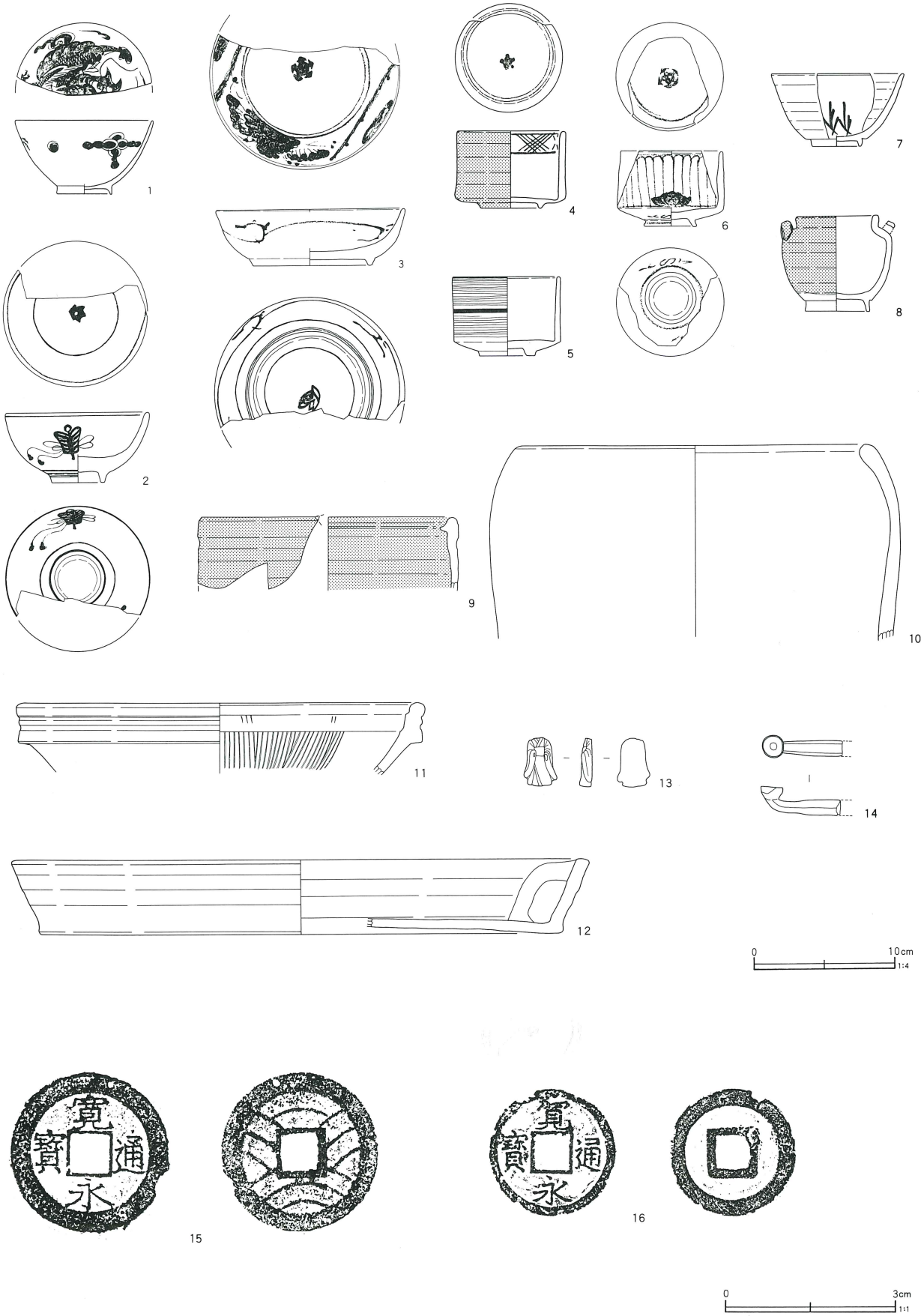
第16号土壙（ＳＫ16　第13・15図）

Ｂ区Ｄ－５グリッドに位置し、ＳＫ18と重複する。当初は形態などから井戸跡と考えたが、底面までが浅かったため、土壙と判断した。底面は平坦で、底板状の脆弱な木製品が出土した。平面形態はほぼ円形である。覆土はＳＫ７に類似している。11は蓋で、外面の

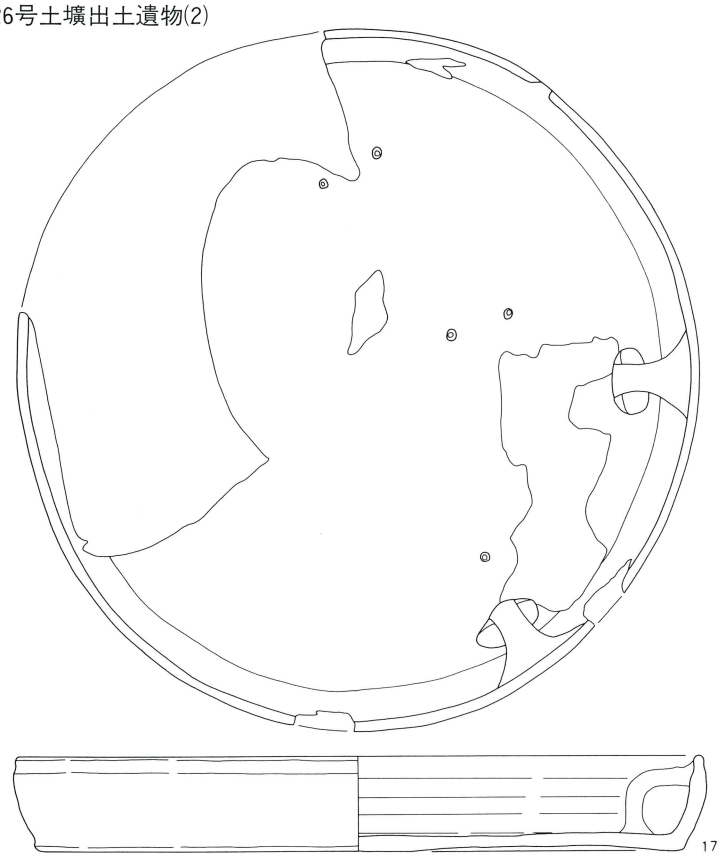
第15図　土壙出土遺物

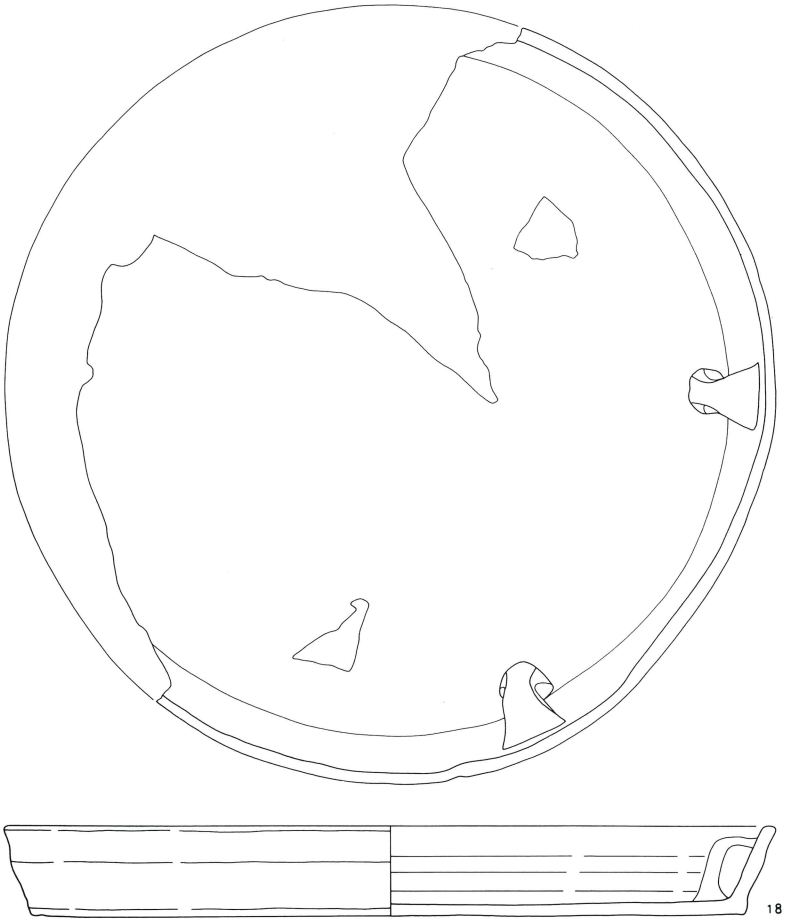

SK7
1
2
3
4
5
7
8
SK9
6
SK12
9
10
SK16
11
12
13
0
3cm
1:1
SK20
14
15
16
SK22
17
0
10cm
1:4

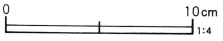
第16図　第26号土壙出土遺物(I)



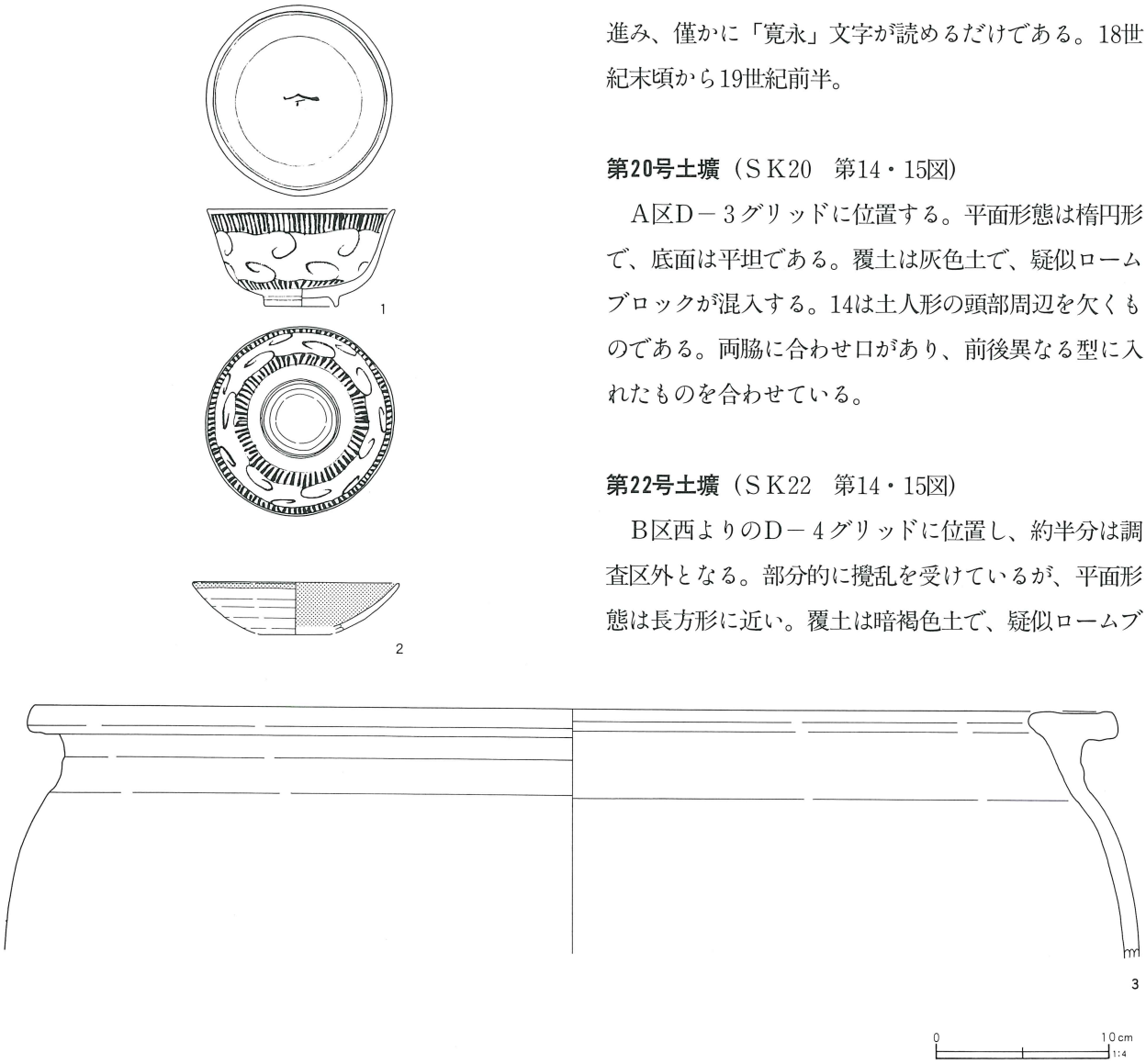
第17図　第26号土壙出土遺物(2)







第18図　第29号土壙出土遺物



ロックが混入する。遺物は覆土中より出土した。15は筒形碗、16は肥前産筒形碗である。17は素焼きの火消し壷である。18世紀後半。

第26号土壙（ＳＫ26　第14・16・17図）

Ａ区Ｄ－３・４グリッドに位置し、東側の約半分は調査区外となる。平面形態は長方形に近く、底面は平坦である。覆土は暗褐色土で、灰色ブロックなどが混入し、多量の遺物が腐食した木片とともに覆土中より出土した。遺物の年代は18世紀末頃から19世紀前半頃のものが多く、少量ではあるが18世紀前半の遺物が混じる。１は瀬戸産、２は肥前産染付碗である。２は体部に軍配文が描かれ、底部がやや厚く、染付の色合いも濃い。３は18世紀前半の肥前産皿で、この土壙内ではやや古い様相をもつ。４・６は肥前産、５は瀬戸美濃産の筒形碗である。４は外面に青磁がかかる。７は京信楽産の小杉文の小碗である。８は瀬戸美濃産の灰釉小壷である。９は瀬戸美濃産の片口鉢、10は素焼きの鉢である。11は擂り鉢の口縁部破片（堺産か）。12・17・18は焙烙で、17には針金で補修した孔が穿たれている。13は土人形で、頭部を欠く。貴婦人像か。14は煙管の雁首部分である。15・16は寛永通宝である。

み釉薬がかかる。12は平瓦を転用した砥石で、全面に使用痕が認められる。13は寛永通宝で、かなり風化が進み、僅かに「寛永」文字が読めるだけである。18世紀末頃から19世紀前半。

第20号土壙（ＳＫ20　第14・15図）

Ａ区Ｄ－３グリッドに位置する。平面形態は楕円形で、底面は平坦である。覆土は灰色土で、疑似ロームブロックが混入する。14は土人形の頭部周辺を欠くものである。両脇に合わせ口があり、前後異なる型に入れたものを合わせている。

第22号土壙（ＳＫ22　第14・15図）

Ｂ区西よりのＤ－４グリッドに位置し、約半分は調査区外となる。部分的に攪乱を受けているが、平面形態は長方形に近い。覆土は暗褐色土で、疑似ロームブ

第４表　土壙出土遺物観察表（第15図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	出土位置	備　考
1	染付碗	(9.0)	4.5	(4.1)				40	ＳＫ７No.８	瀬戸美濃産
2	染付筒形碗	(7.1)	6.5	3.8				60	ＳＫ７	
3	染付碗	8.8	4.6	3.9				100	ＳＫ７	瀬戸美濃産
4	染付碗	(11.0)	6.1	(4.6)				20	ＳＫ７No.１	肥前産
5	砥石	残存長7.6、幅3.9、厚さ1.2cm、重さ48.0ｇ							ＳＫ７	平（桟）瓦からの転用
6	擂鉢	(34.4)	(4.2)		ＡＣＦ	普通	茶色	10	ＳＫ９一括	
7	砥石	残存長7.5、幅4.4、厚さ1.2cm 、重さ41.8ｇ							ＳＫ９一括	平（桟）瓦からの転用
8	石臼	半径15.0、高さ5.5cm、重さ1,730ｇ							ＳＫ９	
9	灰釉皿	(10.4)	2.3	4.0	Ａ	良好	乳灰色	40	ＳＫ12	外面煤付着 瀬戸美濃産
10	灰釉鉢			12.4	砂	良好	濃茶色	30	ＳＫ12	瀬戸美濃産
11	蓋	5.8	3.9					70	ＳＫ16	瀬戸美濃産 外面のみ灰釉
12	砥石	残存長5.0、幅4.3、厚さ0.7cm、重さ15.0ｇ							ＳＫ16No.５	平（桟）瓦からの転用
13	古銭	直径2.35、孔径0.7cm、重さ3.1ｇ							ＳＫ16	寛永通寶　銅銭
14	土人形	残存高5.4、幅4.0、厚さ3.2cm							ＳＫ20	立位人物像
15	筒形碗	(8.8)	5.5	3.8				30	ＳＫ22	肥前産
16	染付筒形碗	7.0	5.4	3.7				70	ＳＫ22	肥前産
17	火鉢		(15.9)	17.4	ＡＢＣＤＦ	普通	橙褐色	40	ＳＫ22	

第５表　第26号土壙出土遺物観察表（第16・17図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	出土位置	備　考
1	染付碗	(9.7)	5.2	3.9				45		瀬戸産
2	染付碗	10.2	4.9	3.8				65		肥前産 内：見込五弁花文 外：軍扇文
3	染付皿	13.4	3.9	8.6				65		肥前産 内：見込五弁花・草文 外：唐草文
4	染付筒形碗	7.7	5.4	4.3				70		肥前産
5	筒形碗	7.6	5.6	4.0				100		瀬戸美濃産 外：胴部沈線
6	染付筒形碗	(7.2)	5.2	3.7				40		肥前産 内：見込五弁花文
7	染付碗	(9.3)	5.1	3.6				50		京信楽産 外：小杉文
8	灰釉小壷	5.8	6.7	4.4				90		瀬戸美濃産
9	片口鉢	(18.4)						30		瀬戸美濃産
10	鉢？	(14.4)	(13.4)			普通	褐色	20		
11	擂鉢	(28.0)	(5.3)		ＡＥＦ	普通	茶褐色	10		堺産？
12	焙烙	(40.8)	5.2	(36.8)	ＡＢＣＦ	普通	灰色	20		
13	土人形	残存高3.4、幅2.3、厚さ0.8cm								立位人物像
14	キセル	残存長5.7、径1.5、幅1.1cm								
15	古銭	直径2.8、孔径0.7cm、重さ3.2ｇ								寛永通寶　鉄銭（四文銭）
16	古銭	直径2.2、孔径0.6cm、重さ1.9ｇ								寛永通寶　銅銭
17	焙烙	36.0	5.0	34.0	ＢＤＦ	普通	褐灰色	50		補修孔あり
18	焙烙	40.6	4.7	37.8	ＡＢＣＦ	普通	褐灰色	70		

第６表　第29号土壙出土遺物観察表（第18図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	出土位置	備　考
1	染付碗	10.9	5.6	4.3				100		肥前産
2	灰釉灯明皿	(12.0)	(3.0)					25		瀬戸美濃産
3	甕	(62.4)	(14.0)		ＡＤＦ	普通	褐灰色	5		

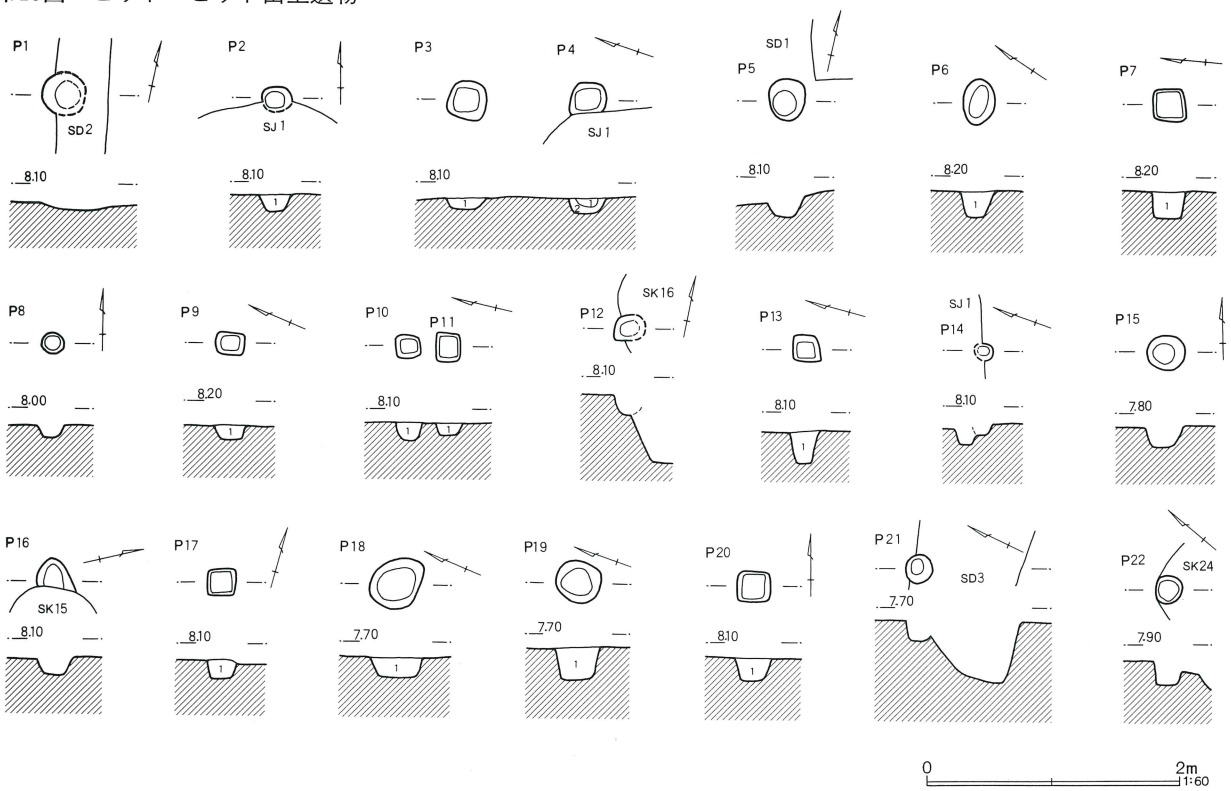
第29号土壙（ＳＫ29　第14・18図）

Ａ区Ｃ－３グリッドに位置する。ロクロピット状の土壙で、平面形態は円形である。覆土はＳＫ７に類似する。遺物はいずれも覆土中より出土した。１は肥前産染付碗である。外面は放射状文と唐草文の組合せで、内面の茶溜まりには記号がみえる。２は瀬戸美濃産の灰釉灯明皿で、内面及び口縁部外面に釉が及ぶ。３は産地不明の大甕で、肥甕に使用されたものとみられる。19世紀中から19世紀後半。

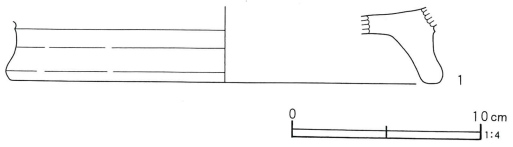
(3)　ピット

ピットはA区に５基、B区に17基の合わせて22基検出された。いずれも単独のピットと判断したが、典型的な掘立柱建物跡としては配置が不規則なことや形態や掘り込みが不十分であるためである。しかし、掘り込みが浅いながらもいずれも同規模を保っており、何らかの構造物の一部であることは明らかである。ピット掘形には大きく分けて円形または楕円形のものと、方形のものがある。いずれも直径・一辺が30cm前後、深さは20～30cmとある程度の規格性をもつが、覆土にやや違いがある。前者は暗褐色または黒褐色の色調で、黄褐色粒子や同ブロックなどを主体に混入する。後者は黒色に近い色調で、炭化粒子や焼土粒子を主体に混入する。ピット間での重複はなかったが、土壙との重複から少なくとも一部は江戸時代後期以前のものと考えられる。遺物はＰ７を除いては出土しなかった。第19図１はＰ７の覆土中から出土したもので、土師質の盤または鉢と考えられる。高台は緩やかに「ハ」の字状にひらき、内面は丁寧に磨かれている。推定底径(高台）は24cmである。

第19図　ピット・ピット出土遺物



Ｐ２
1　暗褐色土　黄褐色ブロック多量含む。シルト質。
Ｐ３
1　黒褐色土　炭化粒子、焼土粒子、黄褐色粒子少量含む。シルト質。
Ｐ４
1　黒　色　土　炭化粒子、焼土粒子少量含む。シルト質。
2　黒褐色土　炭化粒子、焼土粒子多量、黄褐色粒子少量含む。シルト質。
Ｐ６
1　黒褐色土　黄褐色ブロック多量、炭化粒子、焼土粒子少量含む。シルト質。
Ｐ７
1　黒褐色土　黄褐色ブロック多量、炭化粒子、焼土粒子少量含む。シルト質。
Ｐ９
1　黒褐色土　黄褐色ブロック多量、炭化粒子、焼土粒子少量含む。シルト質。
Ｐ10・11
1　黒褐色土　炭化粒子、焼土粒子、黄褐色粒子少量含む。シルト質。
Ｐ13
1　黒　色　土　黄褐色ブロック多量、炭化粒子少量含む。シルト質。
Ｐ17
1　黒　色　土　黄褐色粒子多量、炭化粒子、焼土粒子少量含む。シルト質。
Ｐ18
1　黒褐色土　炭化粒子少量含む。シルト質。
Ｐ19
1　暗褐色土　焼土粒子、炭化粒子少量含む。シルト質。
Ｐ20
1　黒褐色土　黄褐色ブロック、炭化粒子少量含む。シルト質。



第７表　第７号ピット出土遺物観察表（第19図）

番号	器　　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	出 土 位 置	備　　考
1	盤？		(4.0)	(22.6)	ＡＢＤＦ	普通	褐色	10		

第８表　ピット一覧表

番号	位　　置	形　態	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
1	Ｄ－５	円形	(0.36)	(0.34)	0.08
2	Ｄ－４	円形	0.24	(0.19)	0.14
3	Ｄ－４	方形	0.31	0.31	0.10
4	Ｄ－４	方形	0.29	(0.24)	0.12
5	Ｄ－５	楕円形	0.33	0.29	0.14
6	Ｄ－５	楕円形	0.36	0.26	0.20
7	Ｄ－５	方形	0.26	0.26	0.21
8	Ｄ－５	円形	0.19	0.16	0.10
9	Ｄ－５	方形	0.24	0.18	0.12
10	Ｄ－５	方形	0.20	0.19	0.14
11	Ｄ－５	方形	0.23	0.20	0.09
12	Ｄ－５	楕円形	(0.25)	0.20	0.17
13	Ｄ－４	方形	0.22	0.22	0.25
14	Ｄ－４	円形	(0.15)	0.14	0.10
15	Ｂ－３・Ｃ－３	円形	0.31	0.27	0.17
16	Ｃ－４	楕円形	(0.27)	0.26	0.14
17	Ｄ－４	方形	0.23	0.21	0.15
18	Ａ－２	楕円形	0.49	0.37	0.16
19	Ａ－２	円形	0.35	0.32	0.26
20	Ｄ－５	方形	0.27	0.24	0.18
21	Ａ－３	円形	0.23	0.22	0.17
22	Ｄ－４	円形	0.22	0.21	0.20

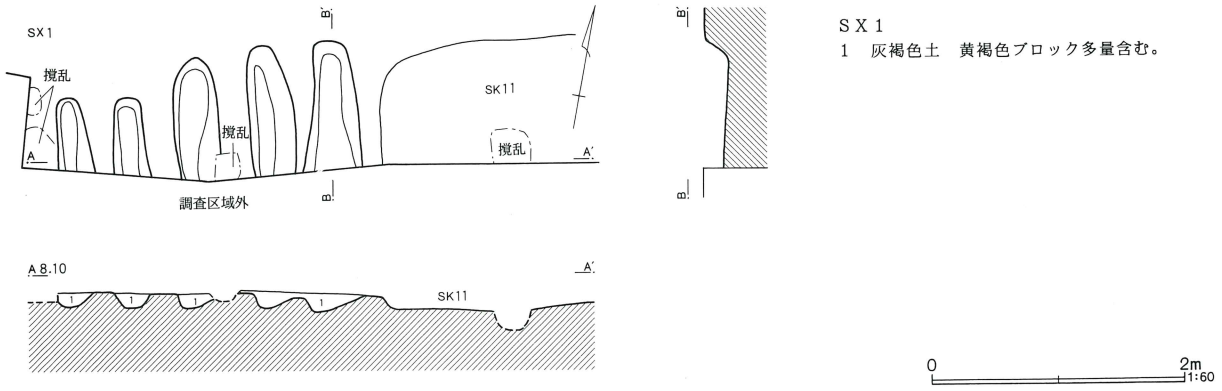
３．その他の遺構と遺物

(1)　畝状遺構

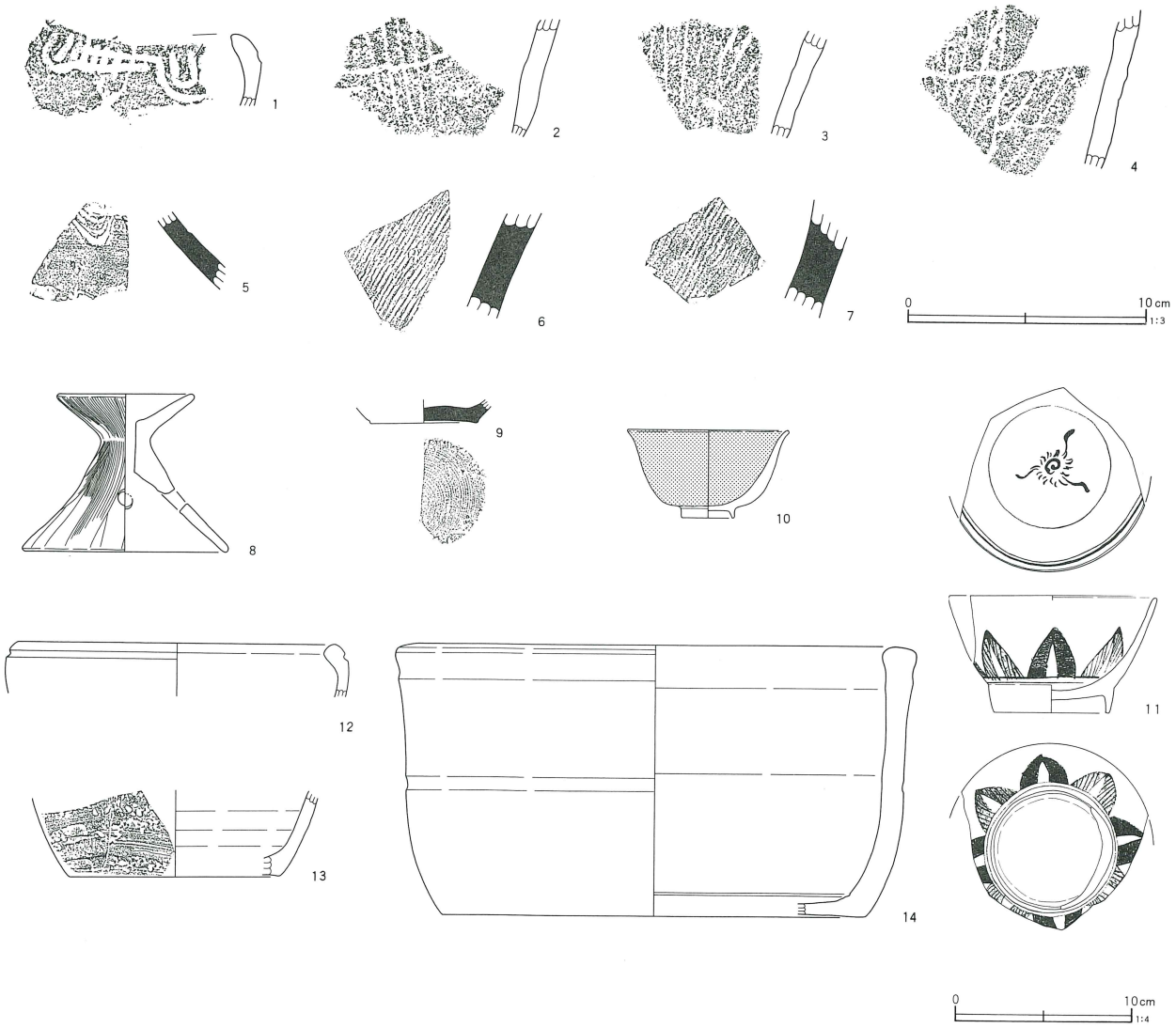
畝状遺構はＢ区Ｄ－４・５グリッドで検出された。畝状遺構としたものは幅約30cmの溝と平坦面が交互にあらわれた遺構で、Ｂ区南西隅に位置している。畝状遺構は調査の結果、北東部分が確認されたことになり、調査区の東側のＳＫ11までは伸びていないことが明らかになっているが、南側と西側は調査区外となっている。畝状遺構の検出状況は畝としての高まりが遺構確認面であったことから、溝状に掘った部分の土の盛り上がりは確認できなかった。畝の高まりはおおよそ溝と合致し、その幅も規則性があるものと考えられるが、部分的には溝と溝が接するような状況もみられた。

覆土は灰褐色の色調を示し、周辺の土壙や溝跡の覆土にみられる疑似ロームのブロックや粒子などが多く含まれる。遺物は出土しなかったが、覆土の状況などから江戸時代以降のものと考えられる。また、東側に位置するＳＤ１は畝状遺構と平行した位置関係にあり、覆土の色調がやや異なるが、混入されるものは類似しており、関連した遺構の可能性も考えられる。

第20図　畝状遺構



第21図　第Ⅰトレンチ出土遺物



第９表　第Ⅰトレンチ出土遺物観察表（第21図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	出土位置	備　考
1	深鉢									曽谷
2	深鉢									堀之内
3	深鉢									堀之内
4	深鉢									堀之内
5	須恵器甕				ＡＣＦ	良好	黒灰色			波状紋
6	須恵器甕				ＡＣＦ	良好	暗灰色			平行叩き
7	須恵器甕				ＡＣＦ	良好	褐灰色		下層ピット覆土	平行叩き
8	土師器器台	(7.8)	8.8	(11.2)	ＡＦ	普通	橙褐色	50		外面全面刷毛目
9	須恵器坏		(1.3)	(6.0)	ＡＢＦ	良好	青灰色			
10	碗	9.1	4.9	3.0				80		京焼風
11	染付碗	(11.6)	6.6	6.6						外：剣先文
12	鉢	(17.8)	(2.9)		ＡＢＣＤＦ	良好	褐色	5		
13	鉢		(4.8)	(12.0)	ＡＢＣＦ	良好	褐灰色			
14	鉢	(29.0)	15.1	(23.9)	ＡＤＦ	普通	橙褐色	10		

(2) トレンチ及び出土遺物

ここでは調査の便宜上、遺構として捉えることができなかったA区の埋没谷やトレンチ内出土遺物などについて記述する。

A区では西側部分の新河岸川寄りにも遺物の分布が認められたが、遺構の有無については水位が遺構確認面付近まで上がっていたこともあり、遺構の検出が困難であった。そこで調査区に南から4箇所のトレンチを設定した。

第1トレンチから第2トレンチにかけては流路跡と思われる幅2～2.5mの溝状遺構の中から古墳時代前期の遺物が集中して出土した。また、この溝状遺構は遺物とともに砂粒や砂利もみられ、幅も一定していなかったことから、当初は流路跡として考えた。しかし、北側の第3トレンチでは検出できなかったことや第1トレンチの南側にもこの溝状遺構は伸びているような状況が窺われたため、方形周溝墓の可能性も浮上してきた。しかし、調査地点の水位が上がり、状態が悪く確認はできなかった。また、第3トレンチでは平安時代の遺物は出土したが、この付近では古墳時代の遺物は出土しなかった。第4トレンチでは攪乱が多く、近世の陶磁器類が多く出土し、古代の遺物などは出土しなかった。

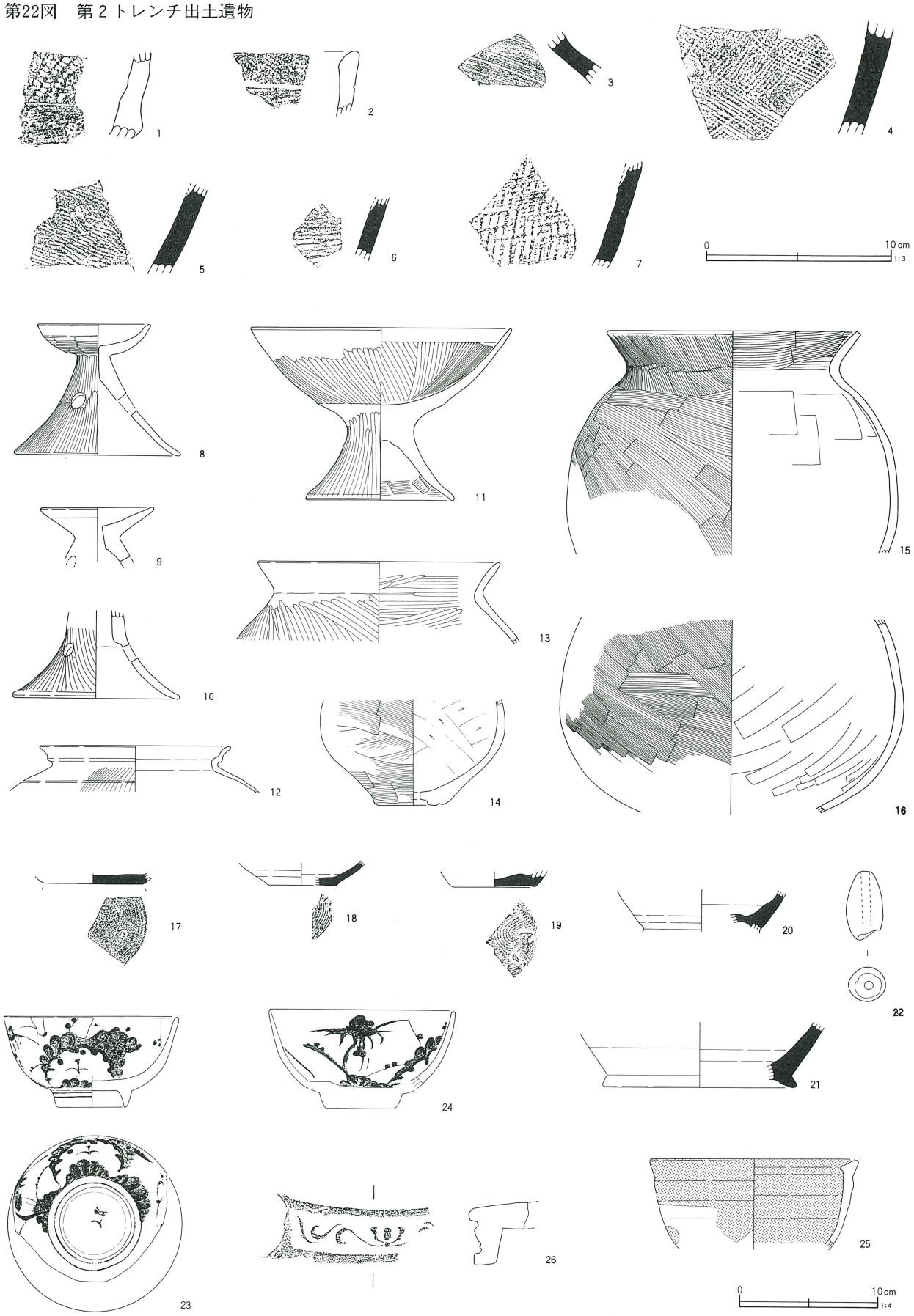
第1トレンチ出土遺物（第21図）

第1トレンチからは縄文後期、古墳時代前期、平安時代、江戸時代の土器類が出土している。1～4はいずれも縄文後期の深鉢小破片である。5～7は古墳時代後期から平安時代の須恵器甕破片である。8は古墳時代前期の土師器器台で、三方に透かしをもつ。9は平安時代の須恵器坏破片である。南比企産。10～14は江戸時代後期の土器群で、10は陶器の碗であるが、生産地は不明である。11は外面に小杉文を濃淡で交互に配する肥前産碗である。12～14は土師質の鉢と考えられ

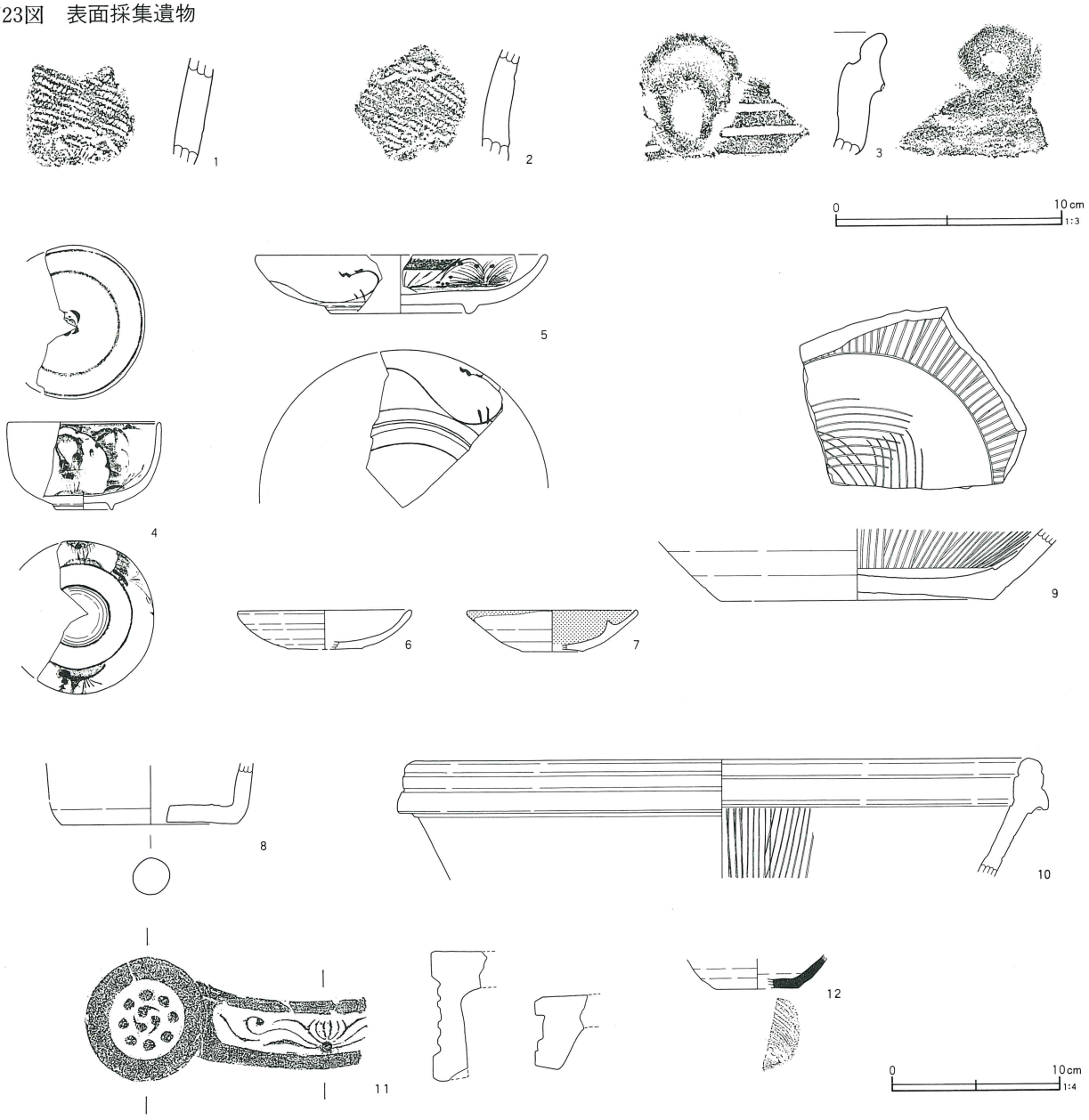
第10表　第2トレンチ出土遺物観察表（第22図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	出土位置	備　考
1	深鉢									加曽利EIII
2	深鉢									曽谷
3	須恵器甕				ABF	良好	青灰色		下層	平行叩き
4	須恵器甕				ABCF	良好	黒灰色			格子叩き
5	須恵器甕				ACF針	良好	灰色			南比企産　平行叩き
6	須恵器甕				ACF	良好	暗灰色			平行叩き
7	須恵器甕				ACF	良好	青灰色			格子叩き
8	土師器器台	(7.9)	9.4	11.6	ADF	普通	褐色	80	下層	外面全面ミガキ
9	土師器器台		(3.9)	7.9	ABCF	普通	褐色	60		
10	土師器器台		(6.3)	(11.6)	ABCF	普通	褐色	30		外面ミガキ
11	土師器高坏	18.6	12.3	10.5		普通	明褐色	90	下層	
12	土師器甕	(13.3)	(3.3)		ABCDF	普通	明褐色	10	下層	
13	土師器甕	(17.2)	(5.8)		ACF	普通	褐色	20	下層	
14	土師器壺		(7.5)	4.8	ABF	普通	褐色	20	下層	外面刷毛目
15	土師器甕	(17.8)	(16.0)		F	普通	暗褐色	10	下層	外面・内面口縁部刷毛目
16	土師器甕		(11.5)		ABF	普通	暗褐色	40		外面刷毛目
17	須恵器坏		(0.8)	(7.1)	ACF針	良好	灰色			南比企産
18	須恵器坏		(1.6)	(5.0)	ABF	良好	灰色			
19	須恵器坏		(1.2)	(6.0)	AF	良好	青灰色			
20	須恵器長頸壺		(3.0)		AF	普通	暗灰色	20		
21	須恵器長頸壺		(4.7)	(13.4)	ABF	普通	灰色	5		
22	土錘	4.8	2.7	0.6	ACF	普通	褐色	90		
23	染付碗	(12.7)	6.5	5.2				70		肥前産 外：草花文 底部に記号
24	染付碗	(13.4)								肥前産 外：草花文
25	(片口)鉢	(15.0)						30		瀬戸美濃産
26	軒桟瓦									

第22図　第２トレンチ出土遺物



第23図　表面採集遺物



第11表　表面採集遺物観察表（第23図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色調	残存率	出土位置	備　考
1	深鉢									勝坂
2	深鉢									勝坂
3	深鉢									曽谷
4	染付碗	9.1	5.3	3.5				60		肥前産
5	染付皿	(17.2)	3.5	(8.2)				20		肥前産 内：扇と草文 外：唐草文
6	皿	(10.2)	2.3	4.4	A	良好	赤茶色	40		瀬戸美濃産
7	灰釉灯明皿	(10.0)	2.5	(3.6)	AF	良好	乳白色	20		
8	植木鉢			10.7	A砂	良好	淡赤褐色			
9	擂鉢		(4.2)	(16.1)	ACF	普通	赤茶色	20		
10	擂鉢	(36.4)	(7.0)		ACF	普通	褐灰色	5		
11	軒桟瓦									
12	須恵器坏		(1.8)	(5.0)	AF	良好	橙褐色			酸化焔焼成

る。13は体部下端に叩きのような痕跡が認められる。

第２トレンチ出土遺物（第22図）

第２トレンチからは第１トレンチと同様の時期に該当する遺物が出土している。遺物の多くは風化しているものが多く、調整痕がやや不明瞭である。１・２は縄文式土器の破片で、１は中期加曽利ＥⅢ、２は後期曽谷式である。３～７は古墳時代から平安時代にかけての須恵器甕破片である。３・５・６は平行叩き、４・７は格子叩きである。８～10は土師器器台である。いずれも三方に透かしをもつものと考えられ、坏部は横方向に、脚部は放射状にヘラミガキがされている。部分的に器面に赤彩されたような痕跡がみとめられる。11は土師器高坏で、坏部、脚部とも放射状にヘラミガキされている。12は「Ｓ字口縁」をもつ土師器台付き甕の破片で、胴部上半は刷毛目で調整される。13･15･16は土師器甕の破片である。いずれも口縁部が短く、胴部に最大径をもつものである。13の刷毛目調整はやや粗い。14は底部穿孔の壷形土器の胴部下半部分である。底部の穿孔は焼成前に穿たれたものである。17～19は須恵器坏の底部破片である。底部調整は17が全面回転ヘラケズリ、18･19が回転糸切りである。20･21は長頸瓶または長頸壷の底部付近の破片である。22は土師器土錘で、基部を欠く。23・24は肥前産染付碗で草文をあしらったものである。25は瀬戸美濃産の(片口）鉢である。内面から外面にかけては浸けかけの釉がみられる。26は軒桟瓦の瓦当で、中心飾りをもつ均正唐草文である。

表面採集遺物（第23図）

ここではＡ・Ｂ区で表採された遺物について記述する。

１・２は縄文中期勝坂式土器、３は同後期曽谷式土器の破片である。４・５は肥前産の碗と皿である。６は皿、７は灰釉灯明皿であるが、６も結果として口縁部における煤などから灯明皿として使用されたものとみられる。８は土師質の植木鉢の破片である。９・10は擂鉢の破片である。産地は不明。11は軒桟瓦で、軒丸部は素文の周縁、内区は中心部が三つ巴文の周囲に珠文が８個配される。軒平部は均正唐草文である。12は須恵器坏の底部破片で、底部は回転糸切り調整される。

第12表　新旧対照表

新番	旧番
ＳＪ１	←
ＳＪ２	←
ＳＤ１	←
ＳＤ２	←
ＳＤ３	←
ＳＤ４	←
ＳＲ１	←
ＳＸ１	←
Ｐ１	←
Ｐ２	←
Ｐ３	Ｐ4
Ｐ４	Ｐ3
Ｐ５	←
Ｐ６	←
Ｐ７	←
Ｐ８	←
Ｐ９	←
Ｐ10	Ｐ11
Ｐ11	Ｐ10
Ｐ12	←
Ｐ13	←
Ｐ14	←
Ｐ15	←
Ｐ16	ＳＫ16
Ｐ17	ＳＫ20
Ｐ18	ＳＫ35
Ｐ19	ＳＫ34
Ｐ20	ＳＪ２・Ｐ１
Ｐ21	←
Ｐ22	←
ＳＫ１	←
ＳＫ２	←
ＳＫ３	←
ＳＫ４	←
ＳＫ５	←
ＳＫ６	←
ＳＫ７	←
ＳＫ８	←
ＳＫ９	←
ＳＫ10	←
ＳＫ11	←
ＳＫ12	←
ＳＫ13	←
ＳＫ14	←
ＳＫ15	←
ＳＫ16	ＳＥ１
ＳＫ17	←
ＳＫ18	←
ＳＫ19	←
ＳＫ20	ＳＥ２
ＳＫ21	←
ＳＫ22	←
ＳＫ23	←
ＳＫ24	←
ＳＫ25	←
ＳＫ26	←
ＳＫ27	←
ＳＫ28	←
ＳＫ29	←
ＳＫ30	←
ＳＫ31	←
ＳＫ32	←
ＳＫ33	←
ＳＫ34	ＳＫ36
ＳＫ35	←

Ⅴ　まとめ

南久我原遺跡第２次調査からは、古墳時代の集落跡や江戸時代後期の河岸場に関わる遺構などが検出された。既に南久我原遺跡第１次調査の成果もあり、ある程度遺構の存在は予想できたところであるが、今回、古墳時代前期・後期の集落跡が新河岸川左岸の自然堤防上で検出されたことや江戸時代後期の古市場河岸に関連する遺構が発見されたことは、今後荒川低地の遺跡を考える上で大きな成果といえる。ここでは南久我原遺跡における古墳時代と古市場河岸についてまとめておきたい。

南久我原遺跡第２次調査では、Ｂ区から古墳時代前期・後期あわせて２軒の住居跡が検出された。Ｂ区はＡ区に比べて高台にあり、Ａ区では住居跡は検出されなかったことから、Ｂ区が位置する高台を中心に集落が形成されているものと考えられる。後期のＳＪ１の遺物には土師器坏、甕、甑などが出土している。坏はいわゆる「比企型坏」で、内面及び口縁部外面は赤彩される。ＳＪ２からは土師器甕の破片が１点出土したが、ＳＪ１と同様風化が著しかった。当初はこの２軒の住居跡は同一の方位を示していたことやＳＪ２の土器の風化が進んでいたこともあり、ＳＪ２も東側にカマドをもつ後期の住居跡と考えていた。しかし、甕の形態が異なることや付近でも古い様相の土器小破片が出土したことから、前期の住居であると判断した。

また、埋没谷の中の流路跡とみられる遺構からは（トレンチ調査であったが）古墳時代前期の高坏、器台、「Ｓ字」台付甕、甕、底部穿孔の壺などが出土している。これらの遺物は上流から流されてこの地点に残っていたことも考えられるが、むしろ器台や底部穿孔の土器が出土している点を重視すると、流路跡と考えた遺構は方形周溝墓の溝跡の一部であった可能性もある。方形周溝墓が河川に隣接して築造されると、河川の氾濫によってその一部が削られたり、崩落したりすることは予想されるところである。さらに現在の新河岸川は流路を度々変えていたことなどを考慮すると、この付近まで対岸の権現山遺跡から続く方形周溝墓群が新河岸川の対岸にも形成されていたとしても不自然ではない。

一方、平成７年に行われた南久我原遺跡第１次調査では、古墳跡、掘立柱建物跡などが検出されている。古墳跡は周溝の約1/3が検出され、土師器高坏、器台、台付甕、甕、小形壷、埦、横瓶などの前期から後期までの遺物が出土している。前期の土器群については古墳の周溝掘削時に流れ込んだものと理解し、周溝の規模から後期の古墳跡と考えられている。南久我原遺跡第１次調査と第２次調査の調査区は第６図に示したように至近距離に位置し、ともに古墳時代から江戸時代の遺物が出土するなど遺跡の内容において類似している点が多く、基本的には連続する一つの遺跡として捉えた方が妥当であろう。

問題は古墳時代の遺構についての評価である。集落の存在は明らかになったが、墓域については現状では不透明といえる。これには第１次調査や第２次調査にしても狭い範囲の調査であったことから、遺跡や遺構の全体像を捉えにくい面をもっているが、古墳時代前期の土器群が溝状遺構から出土することが大きな要因となっている。本稿では方形周溝墓の可能性をあげておいたが、前期・後期の集落の存在も明らかになり、今後の調査では集落と墓域の双方から検討を加えていく必要があるだろう。

次に江戸時代後期の遺構・遺物から古市場河岸との関連性について述べてみたい。

今回の調査地点は第４図の町並み図から判断すると、凡そ「橋本屋」、「酒・米店」、「呉服屋」の部分を調査したことになる。この図は明治20～40年頃の町並みであるので、江戸時代後期の町並みと必ずしも一致するものではないが、重要な参考資料といえる。福岡河岸と古市場河岸では、（周辺の抜粋であるので、この景観を鵜呑みにはできないが）町並みの構成が異なっている。福岡河岸は「吉野屋」、「福田屋」、「江戸屋」の問屋と一

部商店で構成されているのに対して、古市場河岸は「橋本屋」の背後に様々な商店が立ち並ぶという構成になっている。これが描かれた背景には抜粋とはいえ、福岡河岸に先がけて河岸が開設された事実とともに養老橋（古市場板橋）の管理・修復に関わってきた古市場村の繁栄があるものとみられる。

今回の調査では、主に江戸時代後期にあたる18世紀後半から19世紀前半の遺構・遺物が検出された。遺構の多くは土壙で、建物などの痕跡は見当たらなかった。土壙は大きく分けて、別の用途で使用されていたものを転用した土壙と、当初からゴミ捨て場として掘られた土壙の二種類がある。前者にはＳＫ16のように厠が廃棄された後にゴミ穴として使用した場合、後者にはＳＫ26のように、前後する時期の遺物を多く含む場合がある。土壙がつくられる位置は、Ａ区の東側からＢ区に集中する傾向がある。町並み図では「呉服屋」と「酒・米店」があった地点になるが、土壙の配置はこれらの店舗とは位置関係も不自然であることから、店舗が開設される以前の遺構とみて間違いないであろう。

また、Ａ区の埋没谷付近では土壙を確認することができなかったが、調査区の南端に僅かながら硬化面がみられた。この部分は町並み図では「酒・米店」の道路寄りにあたるが、硬化面は土間として考えると、通りに面していることから何らかの建物（店舗）が「酒・米店」開設以前に存在したことになる。

今回検出された遺構・遺物の時期は沢田加兵衛によって始められた古市場河岸がその後五軒の問屋へと発展した頃にあたり、対岸の福岡河岸でも河岸が開設し、問屋の操業が既に始まっていた時期になる。出土遺物は日常雑器である陶磁器類が殆どで、一部には素焼きの植木鉢、人形、煙管なども含まれるものの、特に優品などは見あたらなかった。陶磁器類は碗や皿、鉢類が中心で、生産地は肥前産、瀬戸美濃産に概ね二分される。量的には圧倒的に肥前産が多く、瀬戸美濃産が入ってくるのは18世紀末から19世紀初めになってからである。碗類の特徴としては口径が10cm前後のやや小振りの碗や筒形碗が意外に多く、12～13cmの一般的な碗は破片も含めて殆ど出土しなかった。また、少量ではあるがＳＫ26－３、第２トレンチ－23･24、表採－５などのように18世紀前半に位置付けられるような碗皿類も18後半から19世紀前半の遺物に混じって出土している。陶磁器類は破損しない限り使用されることもあり、家財道具の一つとして伝世し、使用されたものとみられる。

古市場河岸については17世紀末の貞享年間に開設されると考えられているが、確かな根拠はなく、むしろ河岸場として成立していくのは18世紀後半の江戸後期とする見方も根強く残っている。今回の調査の成果は少なくとも18世紀末頃にはこの付近に商家または問屋といえるような建物（店舗）が存在したことを裏づけるものであるが、出土した遺物からは問屋などの富を反映したものとは言い難い面もある。調査によって検出された遺構・遺物が町並み図に描かれた「橋本屋」に関連するものではないのは明らかである。それは幕末に栄華を極めた「(沢田) 三次郎」に関連するものであるのか、あるいは古市場河岸の始まりとなった「沢田加兵衛」に関連するものであるのか、さらなる第三者であるかを現状で判断するのは難しく、今後の調査等をふまえて課題としたい。

参考文献

小野美代子　(1998)『南久我原遺跡』　財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
笹森健一他　(2000)『上福岡市史－通史編上巻－』　上福岡市

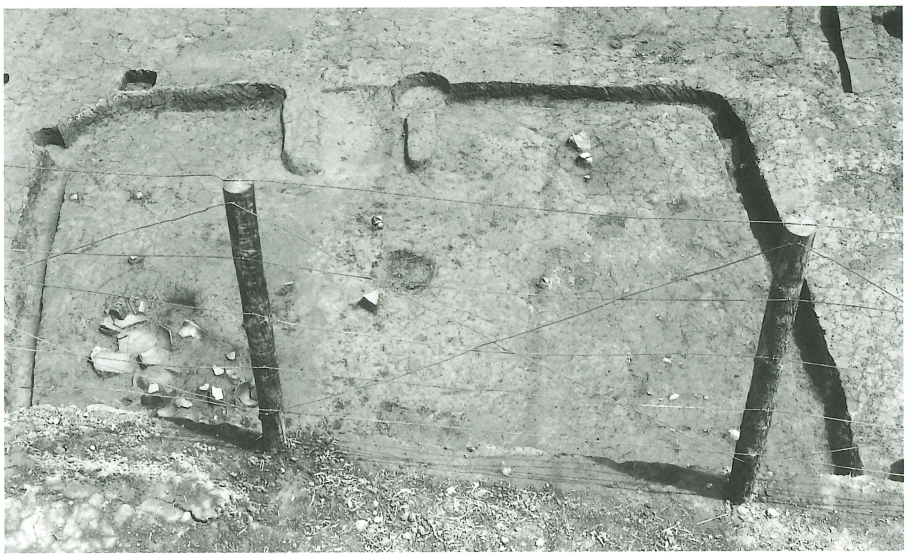
写 真 図 版

遺跡遠景（西から）

遺跡近景（東から）

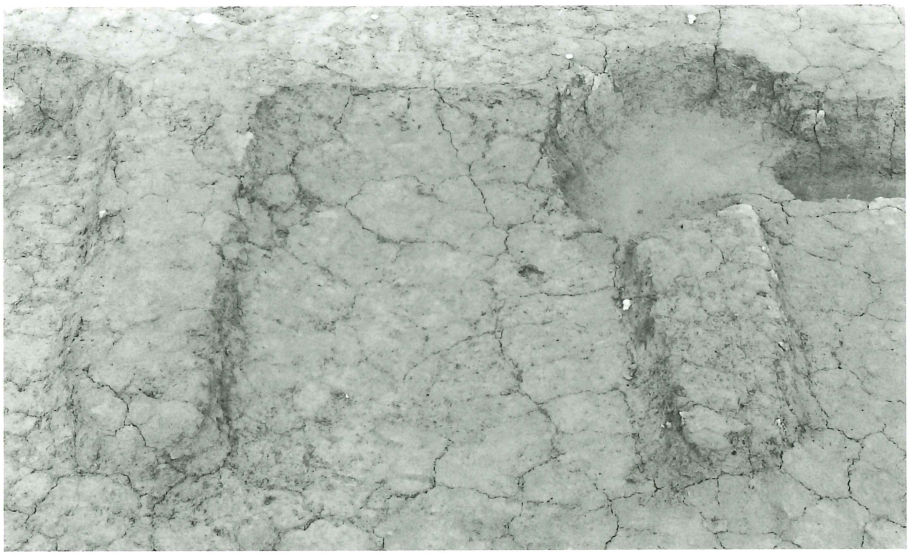
A 区全景（南から）

B 区全景（東から）

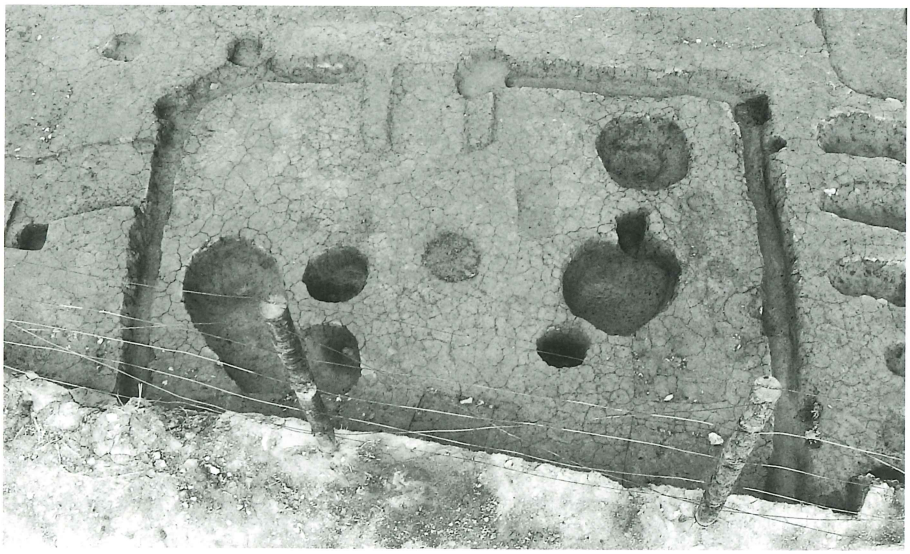


第１号住居跡遺物出土状況

第１号住居跡遺物出土状況

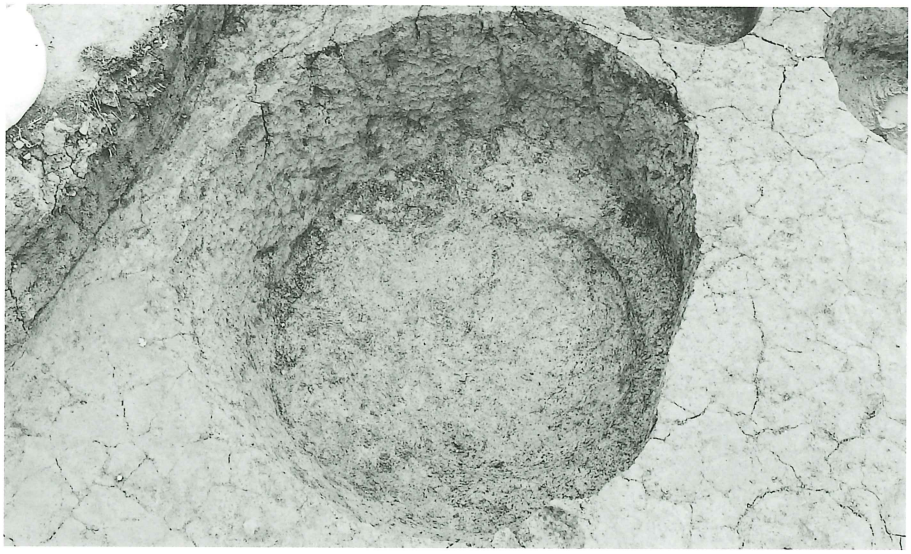


第１号住居跡カマド



第１号住居跡全景

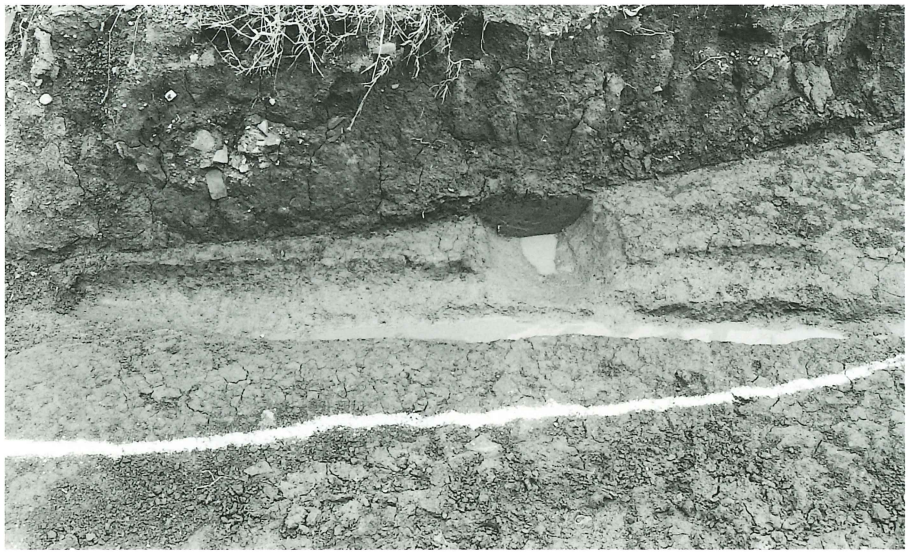
第７号土壙遺物出土状況



第９号土壙

第16号土壙遺物出土状況

第26号・第27号土壙



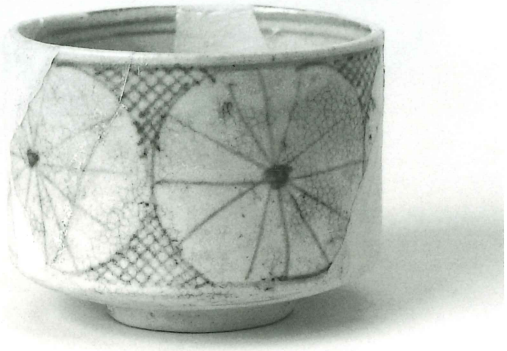
第４号溝跡・第34号土壙

第Ⅰ号住居跡　第９図－５

第Ⅰ号住居跡　第９図－２

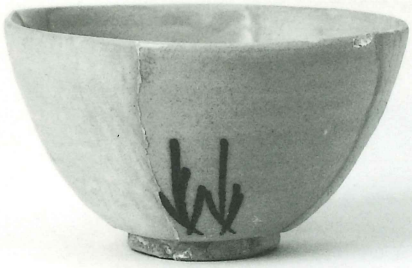
第Ⅰ号住居跡　第９図－８

第Ⅰ号住居跡　第９図－９

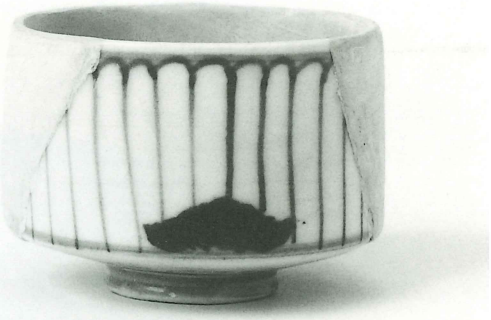


第22号土壙　第15図ー16

第26号土壙　第16図ー 4



第26号土壙　第16図ー 7



第26号土壙　第16図ー 6

第26号土壙　第16図ー 8

第 2 トレンチ　第22図ー23

第12号土壙　第15図－9

表面採集　第23図－6

第26号土壙　第16図－3

第26号土壙　第17図－17

第26号土壙　第17図－18

第１トレンチ　第21図－８

第２トレンチ　第22図－８

第２トレンチ　第22図－11

第１号住居跡出土遺物　第９図

第26号土壙出土遺物
第16図・第17図

砥石　第15図

報告書抄録

ふりがな	みなみくがはらいせき
書名	南久我原遺跡II
副書名	主要地方道大宮上福岡所沢線関係埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第260集
著者氏名	昼間孝志
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369-0108　埼玉県大里郡大里村船木台4丁目4番地1　TEL 0493-39-3955
発行年月日	西暦2000（平成12）年7月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
みなみくがはらいせき 南久我原遺跡	さいたまけんかわごえしおおあざふる 埼玉県川越市大字古 いちばばんちほか 市場124-1番地他	11201	338	35°52′57″	139°31′42″	19980801 ～ 19980930	1,350	道路建設に伴う事前調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南久我原遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 平安時代 中・近世	住居跡　2軒 土壙　35基 溝跡　4条 ピット　22基 畝状遺構　1基	土師器 須恵器 陶磁器 土製品 焙烙 瓦 古銭 砥石 石臼	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第260集

川越市

南久我原遺跡Ⅱ

主要地方道大宮上福岡所沢線関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成12年７月21日　印刷
平成12年７月31日　発行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108　大里郡大里村船木台４丁目４番地１
電話　0493(39)3955

印刷／㈱太陽美術